

靡

草などの、風に傾くことなり。  
嬋々と疊みて、長弱の貌と註す。柳の枝又竹などの、しなゆる形容詞なり。それより、舞姫の姿などのしなやかなるにもいふ。楚詞に、嬋々秋風兮、洞庭波木葉下とあり。

婁

嬋と同字なり。白楊信に婁々たり。婁はもと「婁」の俗字也。

猶

「マダ」「ヤハリ」などの意。物の不十分なるにいふ。例就職以來日猶淺し。春色猶深からず。汝猶之を記せざるか。

尚

加ふる意を有して、「ソノ上ニマダ」などいふに同じ。例殘喘尚存す。關ヶ原の遺趾尚在り。尚々序ながら申上げ候。敵兵尚退かず。

仍

いつも變らずの意。例天變仍至る。甲越仍反目す。

直

曲、枉の反對にて、眞直なること。例正直。直言。廉直。直と同義なり。孟子に自ら反して縮くば、千萬人と雖吾往かむ、とあるが如し。

腥羶

血なまぐさいこと。

羶

香くさいことにて、羊肉の臭をいふ。

波瀾

水の起伏する總稱にて、大小のなみ共に通用す。例煙波渺茫。細波起らず。一波動いて千波起る。

浪濤

稍高き波の稱にて、石に激し、風に吹かれて起つ所のもの。例波浪。高浪。激浪。波の最も激烈なるものにて、奔雷の音響を發して、高く起つもの、稱。例怒濤。松濤。

瀾

波の最も大なるものにて、海洋の波の、緩く穩かに大きく起伏するをいふ。

涙

眼より出づる汗なり。例數行の涙。紅淚千行。血淚潜々。絶間なく出づる涙なり。

難

腦艱難。懊。

脳 艱 難 懊

いかにせんと思ひ煩ふこと。例 懊惱。惱亂。苦惱。行きなやむこと。難義なることに障りなやむこと。例 艱難。艱苦。艱の意に同じ。胸苦しきこと。

【ならぶ】

習 效 倣 倣 肄

幾度も同じことを重ねてならすこと。例 學びて時に之を習ふ。自習。復習。習俗。習慣。練習。習字。他の事物に似すること。真似をすること。例 順を去りて逆に效ふこと勿れ。先例に效ふ。人の譽に效ふ。效に同じ。效に同じ。效に同じ。

倣 倣 倣 倣

藝術を復習すること。例 業を肄ふ。並(竝)并(併)雙 排 比

【ならぶ】

並

二つの物のならびて立つこと。例 並立。日月と並び存す。英雄並び立たず。

竝 併 雙 排 比

並と同字なり。并及び併は同字にて、並と同じ義に用ゐることもあれど、兼併、合併、吞併など、二つ三つを一つにすることなり。并の條を看よ。

二羽の鳥の稱にて、一つがひのこと。例 一雙。雙方。

多くの者を押しならぶること。例 排列。排律。

間のすかぬやうにならぶこと。例 櫛比。比隣。比々として皆然り。

【な

馴 狎 狎 慣

鳥獸の人に親しみなること。又、手ならずことにも。例 馴致。雅馴。親しみなれて、心やすだてにすること。例 狎妓。

なれて、つけあがること。故に輕蔑の意あり。例 狎妓。

幾度も出合ひて、なること。例 習慣。

【なんぞ】

何 奚 曷 安 盍 焉

事の錯雜して、その意のよく解せられざる時、どういふわけぞと質問するこ

奚 曷 安 盍

焉

【なんぢ】

汝 爾 卿

と。

何に似て、根源を尋問する意あり。

いかにしてと、道理を詰めていふ時に用ゐる。

「イヅクンゾ」とも訓む。同條を看よ。

何不の合字なり。「ナンゾ何々セザル」と再讀の字にて、かくくするがよし

と、勸告する詞。【子盍蛋自貳焉】左傳。王欲行之、則盍反其本、孟子。古文に

は、多く「盍」の字を借り用ゐたり。

「イヅクンゾ」とも訓む。同條を看よ。

汝 爾 卿

賤者を呼ぶ稱。女の字も通用す。

汝よりも稍や丁寧なり。

主人より、家來に對していふ辭。「テマハ」といふに當る。

くの部

【に】 乎

于

於

【にぎはす】

賑 贍 賑

【に】 逃

乎 于 於

畧於、于と同じけれども、於よりは軽くして、於の如くに緩廣ならず。此の字

はもと、句末におく字なるが故に、語間にありても上の字を助く。孔子世家に、

已而去魯、斥乎齊、逐乎宋、衛、困於陳、蔡之間。詩經に、心乎愛矣。

於に似て重し。于是主として、下に在る字に係る。於是體言と用言とを兼ねて

係れども、于是體言のみに係る。【友于兄弟施於有政、論語。會于宋、春秋。入

于海、論語。

于よりは輕し。上に在る字に係る。【吾聞出幽谷、遷于喬木者、未聞下喬

木、而入於幽谷者、孟子。

賑 贍

零落たるものを、ひきおこしてやる意。故に振と通ず。【賑恤賑給、

足らぬ所を足してやること。

逃 遁 亡 北 脱

にげいづること。【逃出。逃亡。逃去。避逃。逃走。

くの部 にぎはす にぐ

遁 亡 北 脱 惡 憎 疾 濁 溷 虹 霓

にげかくるゝこと。例 遁逃。遁世。隱遁。

かけおちをする。にげうする。などの意。例 逃亡。

敵にうしろを見せてにぐる意。例 敗北。

ぬけて、にげいづること。例 脱走。脱出。脱兎。擺脱。脱營。

惡憎疾

好の反對。強にくみ嫌ふこと。

愛の反對。面にくみ思ふこと。

嫉の字と同じ意にて、ねたみにくむ意。

濁溷

清、澄の反對。水に物のまじりたること。

濁亂の意。

虹霓

雄虹にて、色彩の鮮明なるものをいふ。

雌虹にて、色彩の不鮮明なるものをいふ。

荷 擔 俄 遽 暴 驟 睨 睨 眦 煎 煎

荷擔

天秤にてかつぐこと。又、負擔のことにも通用す。

肩にてかつぐこと。

俄遽 暴驟 卒

事の急に起ること。又、程なくの意。例 俄然。俄頃。

あはたしきこと。あわてること。例 急遽。遽然。

思ひがけなく、はげしく急なる意。例 暴かに卒す。風雨暴かに至る。

たびく急に起ること。例 驟雨。

「フト」の意にも、粗忽の意にも、忽遽の意にも用ゐらる。

卒に敵に遇ふ。例 卒然。卒倒。輕卒。

睨睨

斜視也と註す。横目にて見ること。例 睨睨。

目をはりつめて、まむきに、にらむこと。邪視の意なし。例 睨眦之怨必報。

煎煎

【にる】 煮 煎 煮 羹

汁のあるものをにえたゝすこと。例 煮沸。汁あるものをつめて、汁の失するまでになること。例 煎茶。煎薬。似肖 彷彿。異物・異種類の同様に見ゆるをいふ。例 類似。似顔。同種類、又はにるべき理ありてにること。例 不肖。肖像。酷肖。さも似たりと譯す。似つかはしきこと。例 彷彿。

ぬの部

【ぬく】 擢 挺 抽 拔

抜 抽 挺 擢。ひきぬくこと。えりてぬき出すこと。例 拔擢。選拔。拔出。引きいだすこと。例 抽出。抽籤。ぬけいづること。例 挺身。挺出。挺進。同類中よりぬき出して、別に取分け扱ふこと。

【ぬすむ】 盜 竊 偷

盜 竊 偷。人の物を取りて、己の物とすること。例 盜用。竊盜。強盜。盜賊。人目にかゝらぬやうに、そつと物をとること。例 竊取。竊盜。人の注意せぬすきはかりて、かすめとること。例 生を偷む。間を偷む。偷安。偷盜。苟偷。

ねの部

【ねたむ】 嫉 妬  
【ねむる】 睡 眠 寝

嫉 妬。己の及ばぬ處から人の長處を憎み、人の賢を害するをいふ。妬と書くも同じ。嫉とも通用す。婦人の夫をねたむ「リンキ」をいふ。睡 眠 寝 寐。かねむりをする事。例 坐睡。昏睡。熟睡。睡眠。目をとちてねむること。寢處にねむること。例 眠食常の如し。臥眠。臥床に就くこと。例 寢室。寢處。正寢。寢衣。寢具。寢臥。

【ねんごろ】 瞑 寐

どこにても場所に拘らずねむること。例 假寐。悟寐。夢寐。唯目を閉づること。心のねむると否とは、關係せず。例 瞑目。瞑想。懇 懇 懇 懇 懇 懇 懇 懇

懇 懇 懇 懇 懇 懇 懇 懇

へだてなくすること。例 懇意。昵懇。懇切。懇願。懇意。たびたび繰返していふこと。例 憂心慙々。詩經。つぶさ(委曲)にいふこと。例 通懇。慙(オロソカニ思ハヌト)せひにと請求する意。懇よりも重し。例 苦請。苦求。

のの部

【のこす】 殘 貽 遺

【のぞく】 除 罽 攘

あましのこすこと。例 殘念。殘物。殘喘。殘餘。衰殘。

後世又は子孫にのこすこと。例 遺留品。遺言。遺產。後に留めおくこと。例 罽。攘。除。

【のぞむ】 望 望 望 望 望 望 望 望

はらふとも訓ず。とりのくること。例 除惡務本。書經。さしゆるす事。例 永錫其家。丁役。小學。とりはらふこと。例 攘之剔之。詩經。

【のぶ】 述 述 述 述 述 述 述 述

遠方又は高所を見ること。例 遠望。望樓。瞻望。望蜀。眺望。仰望。怨望。人望。望見。望洋の嘆。一望千里。官位を望む。高きより低きを見下すこと。例 登臨。照臨。君臨。責臨。親臨。臨幸。臨に似て狭し。顔出しすること。例 朝に蒞む。中國に蒞む。蒞は「莅」とも書く。述。陳。宣。演。叙。自己の意思を口にあらはすこと。人の事業を受継ぎてするにもいふ。例 祖述。著述。述作。陳述。口述。敷き列ぬること。敷へ立つること。例 敷陳。陳情。陳述。遍く世にあらはし。廣くのべ知らしむること。例 傳宣。宣旨。宣告。宣言。いひ廣めて了解せしむる意。例 演說。演義。講演。演繹。演習。

【のぶ】 紱

始終の順序を立て、云ふこと。「ツイヅ」とも訓む。例 紱述 自紱

伸

屈の反對。狭き物を長く引きのぶること。例 欠伸 威令伸ぶ 士氣伸ぶ

延

長く引きのばすこと。例 延長 延引 延年 延齡

舒

卷(木の葉の巻ける如き)又は蹙の反對。圓く巻きたるものをのぶる事、蹙ま

暢

滞ることなく、すらくと通くゆき渡る事。例 暢達

展

舒に似て開く意あり。例 展開 展覽會 親展 展望

上

下の反對。上方にのぼることにて、登ることの速なる時に用ゐる。又のぼりて

【のぼる】

登

登極 登用 登閣

騰

登 上 騰 昇 騰 陞

昇

その頂上にある意。例 上天 上騰 上升

騰

勢よくのぼること。例 升天 升位 升官

昇

日の升る意にて、壯大のことに用ゐる。例 昇平

陸

跳りあがること。物の上へのぼるとは違へり。例 物價騰貴 物論沸騰 奔騰

耳

升と畧同じ。階をのぼることにも、官をのぼる事等にも用ゐる。例 陞級 陞位

已

「アデアル」の意。わけもなく輕げにいひすつる場合

爾

已よりは重し。已は而已をつめていへるなり。「バカリ」といふに當る。

飲

飲 呑 嚥 飲酒 飲水 飯料水 飲宴 強飲 飲酌 暴飲

【のり】

嚙カますして、丸マルのみにすること。例 鶉ウ呑ノミ。併呑ヘイデン。吞舟ドンシウの魚ウチ。咽イン喉コウへ物をのみ下クダすこと。例 嚙エン下カ。

法ハフ則ソク刑ケイ律リツ儀式ギシキ典テン。手本テホンとなること。

制度セイド品式ヒンシキの儀ギ。例 仁人ニジン法ハフ舜禹シユウ。荀子。

刑罰ケイバツの義ギより出で、常法ジャウハフの義ギとなる。例 尙有ホウ典刑テンケイ。詩經。

人の形カタチ物モノの形カタチの上ウヘにつきいふ。

法式フシキ。

手本テホンとなること。例 儀式ギシキ刑ケイ文王モン之典テン。詩經。

乗シヨウ騎キ駕ガ。

車クルマの上ウヘにのぼること。それより何物ナニモノにも上ウヘにのり居イることに轉用テンヨウす。例 乘車シヨウシヤ。

乘馬シヨウバ。乘船シヨウセン。

馬ウマにのること。例 騎馬キバ。騎射キシヤ。騎兵キシヤ。騎手キシユ。精騎セイキ。

車クルマの轡ナガエウマを馬ウマに結び付ムスくこと。それより車クルマに上ノボることに、車クルマにて行ユくこと。

【のる】

はの部

にも、他に立タちまタさることにも轉用テンヨウす。例 車駕シヤガ。御來駕ゴライガ。凌駕リヨウガ。枉駕ワウガ。

【はか】

墳フン墓ボ家カ塋エイ。

死者シシヤを埋ウツめたる上ウヘに、土ツチを盛モりて目標モクヘウとせるもの。

死者シシヤを埋ウツめたる處トコロに、標シムシタを立てたるもの。

死者シシヤを埋ウツめたる處トコロに土ツチを高く盛モり、目標モクヘウの樹木ジュモクを植ウゑたるをいふ。

一死者イツシシヤの墓ハカのみならず、或墓地アルボチの一區域イツクイキをいふ。先塋センエイに葬ハウム。舊塋キウエイに葬ハウムなどいふこれなり。

【はかる】

謀ボウ計ケイ籌チウ策サク圖ト度タク量リヤウ料リョウ測ソク算サン議ギ。

人ヒトと相談サウダンすること。又、思慮シリョを凝コウすこと。例 謀計ボウケイ。參謀サンボウ。密謀ミツボウ。遠謀エンボウ。謀畧ボウリヤク。智謀チボウ。權謀ケンボウ。陰謀インボウ。謀議ボウギ。

物の數モノカズを算カズふる意イより轉テンじて、豫想ヨサウし、見積りヒツメを立タつる意イに用モぬる。例 會計ケイケイ。

計度ケイド。計畫ケイワク。早計サウケイ。計畧ケイリヤク。設計セツケイ。計策ケイサク。



算 測 料 量 度 圖 策 籌

算木のことにて、物の数を算ふる時の、数取に用ゐる者なり。それより、工夫  
 策畧の意に轉用す。例 神籌 籌策。  
 工夫し見込みを立つること。例 計策 萬全の策 策畧 良策。  
 重大なる事に對し、圖案を作りて見ながら思慮すること。例 雄圖 後圖 壯圖  
 大圖 遠圖 圖南の鵬翼。  
 物指にて、物の長短をはかることより、轉じて何物にても、長短廣狹大小を  
 はかることに用ゐる。例 揆度 料度 付度 測度 臆度。  
 樹にて物をはかる義より轉じて、物の多少輕重範圍、長短を見積ること。例  
 度量 測量 商量 量見。  
 見識を以てはかり、欺きはかり、又、數をはかる意。例 敵の強弱を料る。善く  
 敵を料る。兵を料る。民を料る。思料。  
 水の深さはかるより、物の距離をはかるに轉用す。例 測量 推測 神變不  
 測 測度。  
 算盤にて、物の數を計ふるより、物の多少の積りを立つること。例 勝算 神算

議 吐 嘔 箱 匣 初 始

廟算 胸算。  
 論議と熟して、相談すること。例 物議を起す。協議 審議 正義 抗議 巷議 議題  
 吐 嘔 嘔 嘔  
 呑の反對。口よりはき出すこと。有形の物體、無形の言辭にも用ゐる。例 吐瀉  
 吐露 吞吐 嘔吐 氣を吐く。氣焔を吐く。  
 口に含めるものをはくにも、氣息の塞がりてはくにも用ゐる。例 噴飯 噴火  
 噴水 噴烟。  
 胃中より、幾度も續けざまにはき出すをいふ。自然に催してはく意。例 嘔吐  
 箱 匣  
 物を入れて、藏め置くものにて、蓋のあるものをいふ。  
 物を入れて、四面を圍めるもの。箱よりも粗末なるもの。  
 初 始 創 首  
 主として、時間の上につきていふ。例 初步 初學 初年 初回 初心 當初 太初  
 終の反對 主として事柄の上につきていふ。例 始めて 備を作る。王道を始む。

創

首

【はしる】

走

奔

趨

【はす】

馳

驅

始終。元始時代。始末。年始。  
新に事を起し始むること。始より強し。例 創業の臣。創始。草創の際。創設。創  
意。  
一番さきのこと。例 卷首。唱首。首尾。

走 奔 趨  
急に駆け出すこと。目的の方面に向ふことにも、にぐる時にも用ゐる。例 逸  
走。疾走。敗走。退走。

奔 奔馬。奔流。奔命。奔走。淫奔。奔馳。  
わき目もふらず、勢強く走ること。目的の方向を定めずにはしること。例 出

小足にて、早く歩むこと。逃げゆくにあらず。例 趨りて庭を過ぐ。趨りて退く。  
先生に道に遭ふ。趨りて進む。

馳 驅 騁  
馬に乗りてはしること。又、一直線にはしること。  
馬をうちてはしらすること。「カル」とも訓む。驅逐といふ時は。逐ひ出す意と

【はた】

旗

旌

幟

旆

【はたへ】

肌

膚

【はぢ】

恥

辱

なる。  
馳に同じ。  
旗 旗幟 旌  
竿頭に羽を插みたるはた。  
のぼりといふものに同じく、龍虎などの如き模様を畫きたるをいふ。  
軍陣に用ゐる標旗なり。漢書の注に、長一丈五尺。幅はその半なりと見ゆ。  
今日の吹流しのことにて、風に翻るもの。大將の旗。大旆。

肌 膚  
身の皮をいふ。例 肌粟を生ず。  
表皮をいふ。例 膚凝脂の如し。膚淺。膚見。完膚なし。

恥 辱 羞 慚 愧 忸 怩  
疾しきことありて、深く心にはち咎むること。「耻」と書くは俗字なり。例 恥辱  
破廉恥。廉恥心。

「ハヅカシメ」と訓む。榮の反對にて、外聞のあしきこと、不名譽のこと。例 屈

差 慚 愧 忸 怩 花 華 話 談 語

辱 汗辱 侮辱 榮辱 凌辱

「ハヅカシガル」、「ハヂラフ」、「ギマリガウルイ」などの意にて、恥よりは其意輕し。 ④ 羞惡 羞恥

恥に似て輕し。「慚」と書くも同じ。 ④ 慚愧

顏のあはせられぬほど、はづかしがること。常に忸怩と連用す。

花 華

草木の花のみにいふ。

話 談 語

「かたる」の條を看よ。  
「かたる」の條を看よ。  
「かたる」の條を看よ。  
花の古字世。草木の花にも、文華の義にも用ゐる。 ④ 英を含み華を咀ふ。

【はなはた】

甚 酷 太 苦

「ギツウ」、「ヨッポド」、「シゴク」などの意にて、普通に用ゐらる。

烈しく、きびしきこと。 ④ 酷暑 酷暑 酷熱 慘酷

【はなつ】

放 發 縱

手に持たれたる者をはなすこと。故に許す意あり。 ④ 放鳥 放免 放鷹 放魚 放逐 奔放

箭をはなつより出でたる字にて、内よりぱつと口のあく事。 ④ 發砲 勃發 風發

鷹 犬などの繩をゆるめて、自由にせしむる意。 ④ 囚を縱つ。羊を縱つ。兵を縱つ。擒縱

【はは】

母 妣

女親をいふ。

【はやし】 妣

亡母をいふ。禮記に生日母死曰妣。

早疾速 夙蚤

晩の反對。日の出の時。又或一定の時よりもはやき意。例 早朝 早晚 早世。

「トク」と訓む。徐の反對。足ばやに行く意。例 疾歩 疾足 疾走 疾行。

遲の反對。例 速力 快速力 神速 敏速。

未明の義にて、早よりは一層はやき時刻をいふ。過去の年月にも、人の一生の上にも用ゐる。例 夙夜 夙に起く。夙に大志を抱く。

【はらふ】 蚤

音義共に早に同じ。

掃拂 攘 擺 祓

帯にて物をはきすつること。静にはくこと。例 掃除 洒掃 掃塵。

急に物をうちらはらふこと。例 拂拭 拂除 拂去 雲霧を拂ふ。拂曉。

追ひはらふ意。例 攘夷 卻攘 攘除 寇を攘ふ。

手にて物を打振ふ意。例 擺脫。

神佛に祈禱して、災禍罪惡等をはらひのくること。例 大祓 祓除。

【はり】 針 鍼

鍼の俗字なり。

布帛を縫ふ「ヌヒバリ」、又は醫療に用ゐる金銀のはりをいふ。

【はる】 晴 霽

大空に雲霧なくして、はれたるをいふ。例 晴天 晴雨計。

雨天のはれたるをいふ。例 雨霽る。光風霽月 霽威。

【はるか】 遙 遐 杳 遼 邈

遠く離れたることの形容語。

邇の反對。遙よりも更に遠き所をいふ。例 遐邇 登遐。

遠くかすかなる意。例 杳渺 杳冥 杳として消息なし。

遙と同義なり。例 遼遠 遼廓 遼絶。

遼と同義。

ひの部

【ひきし】

低テイ卑ヒ矮アイ

高カウの反對ハンタイ物の價モノのひきしにも、地チのひきしにもいふ。例低廉テイレン。低地テイヂ。尊ソンの反對ハンタイそれより轉テンじて、地チのひきしにも、位クラキのひきしにも用ヨウゐる。例卑近ヒキン。卑下ヒゲ。

身長シンチャウの短小タンセウなるにいふ。例矮屋アイタク。矮小アイセウ。矮雞アイケイ。

【ひきめる】

率ソツ帥スエ

諸人シヨニンの從シタガひ來キタるをひきめる意。例引率インソツ。統率トウソツ。將率シャウソツ。率先ソツセン。

人ヒトの上ウヘに立ちて、諸人シヨニンを服從フクジュウせしめ、我意ワガイのまゝにひきめる意。率ソツよりも強ツヨクし。例元帥ゲンスエ。將帥シャウスエ。

【ひく】

引イン

引イン曳エイ牽ケン挽バン輓バン掣セ延エン惹ゼキ援エン

弓ユキをひくことより轉用テンヨウして、廣ヒロく用モチゐる。例引用インヨウ。引力インリキ。拘引コウイン。延引エンイン。引率インソツ。引證インシヨウ。

曳エイ牽ケン

物モノをひきする意。例曳杖エイヂヤウ。衣地イヂを曳ヒク。尾ビを曳ヒク。

網ツナをつけて、牛馬ウシウマなどをひき行く意。それより強シひて物モノをひきつくる意に轉テン用ヨウす。例牽強附會ケンキヤウフクワイ。牽引ケンイン。牽牛星ケンゴウセイ。

力チカラをこめてひくこと。引インよりは其意強ソノイツヨクし。例挽歌バンカ。弓ユキを挽ヒク。挽バンと同ドウじ。例輓近バンキン。

或物アルモノを己オレの方に引き寄ヨせて、其物ソノモノの自由ジユウにさせぬ意。例掣肘セイチウ。

此方コノハウへ招マネき寄ヨする意。例客キヤクを延ヒキく。賢人ケンジンを延ヒキく。附纏ツキマひて、離ハナれがたき意。例惹起ゼキキ。老松碧雲オウソウヒクウンを惹ヒキく。人目ヒトメを惹ヒキく。手テをひき懸カけて、引寄ヒキヨする意。例賢ケンを舉アげ、能ノウを援ヒキく。

【ひげ】

鬚シユ髯セン髭ヒ

頰下ホ、シタのひげをいふ。

兩頰リヤウホのひげをいふ。

鼻下ハナシタのひげをいふ。

【ひげく】

鬻ユウ販バン

【ひそかに】 販 鬻

物品を賣拂ふこと。例 市に鬻ぐ。  
行商にて、物品を賣歩くこと。例 販賣負販。  
密 竊 潜 潜 私 陰

「ヒソカ」すること。「コソリ」すること。即ち人目に觸れぬやうにすること。

密談。密行。秘密。密獵。

人の目を偷んですること。「シノビヤカニ」の意「窃」と書くは俗字なり。例 竊

に考ふ。竊取。竊盜。剽竊。

水中にひそみて、見えぬやうにする意。例 潜行。潜航艇。潜水夫。潜龍。

公の反對。表向きならぬこと。人知れず内證にてすること。例 私に考ふ。私見。

私淑。私情。

陽の反對。人の見ざる、かげにてすること。例 陰に其私を行ふ。陰謀。陰險。陰

德。隱隱。陰氣。陰忍。

【ひたす】 浸

水にて物をぬらすこと。例 川を堰きて城を浸す。浸水。

【ひたす】 漸 涵 均

水をしみこみます意。  
いつとはなしに、次第に水をしみこみますこと。  
水の中につけたくこと。例 涵養。

均 等 齊

量目の差なきが如く、物の輕重優劣なく、等分なるをいふ。例 平均。均分。機

會均等。定價均一。均衡。

段階。階級などの意。それより轉じて類似の事物をいふ。例 差等。等級。等分。

富王侯に等し。

長短なく一様にそろひたること。例 一齊射擊。齊一。

【ひたす】 一 齊

數のひとつ、又第一の義にも用ゐる。例 一統。一たび戎衣して天下定まる。

專一也と註す。一の字と通用す。

【ひたす】 雙 壹 一

雙の對にて、かたゝの義なり。  
單 偏

單

複の反對。一重にて、物の相重らぬこと。それより薄き意に轉用す。例單騎。

偏

「ヤタラニ」一筋ニ「全く」など其事にのみかたよれる意。例偏傾、偏頗、偏僻。

【ひとり】

獨 一人にて相手のなきこと。例獨身、單獨、獨立。

孤

「ミナシゴ」とも訓みて、頼む所寄る所なき人をいふ。例孤兒、老心孤なり。

【ひねる】

特 取分けて、或は「此物ばかり」はの意。例特立。

捻

指にてねぢつくること。

【ひま】

隙 隙と物とのすきまをいふ。又轉じては、交際の中惡しきことにもいふ。例白。

捫

手にてねぢつくること。

撚

捻に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

隙に同じ。

罅

駒の隙を過ぐるがごとし。隙を伺ふ。互に隙あり。例互に罅隙あり。終

罅

物の割目をいふ。それより交の不和なることに轉用す。例互に罅隙あり。終

罅

に罅隙を發く。人罅なければ則ち妖自ら作らず。例退閑、閑暇、閑隙。

罅

忙の反對。仕事なき手すきのこと。例罅隙、罅漏。

罅

物の漏り出づる、穴、隙間などをいふ。例罅隙、罅漏。

罅

開 開闢、啓行、啓蒙。

罅

閉ぢたる門扉をひらくが如く、物と物との間を離す意。例開門、窗を開く。山

罅

川開く。曙色開く。開店。

罅

荒廢せる者か、密閉せる者を、手入れし筋道を付くこと。例四門を開く。土

罅

を開く。荒を開く。

罅

妨害物を取除くことにも、人を教導するにも、敵人を導きて城に入るゝにも

罅

いふ。例啓行、啓蒙。

祛 發 披

幽イウをヒラ開く。  
衣服などの隙間の生ずるをいふ。例襟袂エリタテけて甲観カウケンゆ。  
花のひらくをいふ。それより轉じて、つばめる者のひらくるにも、伏藏フクザウせるものを取出すにも用ゐる。  
分開の義にて、ひろぐる事。例襟エリを披ヒラく。書シヨを披ヒラく。披見ヒケン。直披チヨクヒ。鶴壁クワクシヤウを披キる。

【ひるがへる】

翻 飄

翻フンハシ、飄ハウハシ、翻フンハシ。  
散亂サンラン又は「ヒツクリカヘス」ことに用ゐる。例紅葉當階コウエフリチニル翻弄ホンロウ。翻倒ホンタウ。  
「風のために「ヒラく」と飛ぶこと。例雨雪飄々ウセツヘウク。流飄萬里リウハウマンリ。風飄々カゼヘウヘウとして衣を吹く。孤飄コヘウ。

翻

飛ぶ、「ひるがへる」等の意。例衆鳥翻々シユウアウヘンヘンたり。大鵬續翻タイバウヘンベンす。

廣

廣博弘闊クワウクワクワ。寬クワン。宏クワウ。廣原クワウゲン。廣野クワウヤ。廣表クワウチヤウゼツ。廣長舌クワウチヤウゼツ。廣言クワウゲン。廣告クワウコウ。

【ひろし】

博

幅のひろき意。又廣と畧同様に用ゐらる。例博學ハクガク。博聞ハクブン。博識ハクシキ。博覽ハクラン。博達ハクタク。博愛ハクアイ。博文ハクブン。博引ハクイン。博採ハクサイ。

弘

廣大の義にて、德行事業の上に用ゐらる。例道ミチを弘ヒロむ。

闊

兩者の間のひろきをいふ。例闊クワウ。久闊キウクワウ。

寬

物を容るゝに、十分なるひろさあるをいふ。例寬大クワンダイ。寬宥クワンイウ。寬仁クワンジン。

宏

深、廣、大の意を有す。多くハ物の規模、企畫などの大なるに用ゐる。例宏壯クワウサウ。宏文クワウブン。宏量クワウリヤウ。宏業クワウゲツ。

拾

落ちたる物を取上げる事。例拾遺シツキ。拾穗シツスエ。

摭

拾シツヒ集アツむる意。例英華エイクワを採摭サイセキす。散滯サンタイを收摭シウセキす。ねこそげ、ひろひとる事。

【ふ】

ふの部

經歴ケイレキ。閱ケン。



【ふくむ】 閱 歴 經 含 銜 哺 塞 壅 窒 俯 伏

【ふくむ】  
 單に過ぎゆくこと。例 經過。年月を經。經歷。  
 一つ一つに渡り行くこと。例 履歷。歴史。歴訪。歴詆。歴仕。古跡を巡歴す。既に三世紀を歴。  
 越え渡る意。例 歲月を閱す。閱歷。閱閱。  
 含 銜 哺  
 口中に物の全體を入れること。例 含蓄。含嗽。含英。含有。  
 口にくはふるること。例 杯を銜む。枚を銜む。親鳥雛を銜む。  
 くくむこと。飲食物の口中に在るをいふ。例 三度哺を吐く。哺乳動物。  
 塞 壅 窒  
 彼と此と隔りて、互に通せざるをいふ。例 蔽塞。要塞。四塞。  
 土の横りて、道路のふさがりて通せぬをいふ。例 壅滯。壅蔽。  
 呼吸器のふさがりて、息の通はぬこと。例 窒息。窒碍。  
 俯 伏 偃 臥 俯 伏  
 仰の反對。頭を下げてうつむくこと。例 俯仰天地に愧ぢず。俯臨。俯伏。俯項。

【ふせぐ】 防 禦 拒 捍 防 伏 臥 偃 俯

起の反對。身を地上に横へて、人に見られぬやうにすること。又面を地に付けて先方を畏敬すること。例 伏射。伏兵。埋伏。伏匿。潜伏。伏線。伏罪。畏伏。起伏。  
 足を伸ばして、くつろぎふすこと。例 偃臥。偃息。  
 坐の反對。身を席に横にすること。面を上方に向けて横はるにもいふ。例 臥。薪嘗膽。臥龍。平臥。坐臥。俯に同じ。  
 【ふせぐ】  
 防 禦 拒 捍 (捍)  
 豫め後日の用心をなし置くこと。例 豫防。防備。防塞具。  
 事に差當りてふせぐこと。例 外侮を禦ぐ。四海の寇賊を禦ぐ。災禍を禦ぐ。「コバム」とも訓む。我近邊に寄せ付けぬこと。例 拒絶。拒否。峻拒。抗拒。悍拒。外の害をふせぎて、己を守る意。「捍」とかくも同じ。  
 踏 踏 踏 履 踐 蹂 躪 躡 躡  
 ふみつくること。例 蹴踏。約を踏む。

踏履踐 躑躅 躑躅 躑躅 躑躅

足拍子アシバウシをとりて「ドン／＼」ふみつくるをいふ。例 踏歌タウカ 舞蹈ブタウ。  
 ふみ行く意。例 履行リキョウ 霜を履みて堅氷至る。履歴リキリトク 履徳リキトク。  
 ふまへてをること。即ち固くふみ付けて、立ちをることなり。例 踐祚センソ 實踐躬ジツセンキョウ 行。其言踐むべし。  
 足にてふみて、すり付くこと。「フミニジル」、「フミニチラス」などいふに同じ。  
 例 賊庭を蹂躪す。  
 常に蹂躪と連用す。その意相同じ。躑と紛れ易し。躑ハ音ラン躑ゆる意。  
 軽くふむこと。又、人の後を追ひかけゆくこと。例 追躑ツイチツ 張良漢王の足を躑む。  
 古コ 舊コウ 故コ 陳チン  
 今に對す。日時の上にて久しき以前をいふ。例 古人コジン 古聖コセイ 古語コゴ 古文コブン 古物コブツ。  
 古器コキ 古雅コガ 古往コウ 古詩コシ 萬古マンコ 千古チンコ 太古タイコ 上古ジョウコ 古訓コクン。  
 新の反對 多く年月を経たること。「フルシ」と訓む。例 舊惡キウアク 舊衣キウイ 舊詩キウシ 舊文キウブン 舊家キウカ 守舊シュキウ 舊曆キウレキ 舊臣キウシン 舊幕キウバク 舊都キウト。

故 陳 奮 震 振 揮 顛 戰

新シンの反對ハンタイにて、舊キウの意イに近チカし。例 故人コジン 恙ツイきか。物故ブツコ 故郷コキヤウ 故都コト 故國コク 故因コイン 故舊コキウ。  
 新の反對 久しく年月を経て。物質ブツシツの惡アクしくなれること。俗ソクに「フルクサシ」といふ意。例 陳腐チンポ 陳言チンゴン 陳米チンマイ 陳套チンタウ 新陳代謝シンチンタイシャ。  
 奮フン 震セン 振シン 揮キ 顛セン 戰セン  
 身をふるひ、頭カシラを動ウゴして、飛躍ヒヤクせんとする勢イキホヒをいふ。例 奮前フンゼン 奮進フンジン 奮擊フンキキ 奮鬪フントウ 奮起フンキキ 奮戰フンセン。  
 雷聲ライセイの轟トノロきて、地チを動ウゴすをいふ。例 地震ヂシ 震動シンドウ 震木シンボク 震怒シンド。  
 ばた／＼とふるふことにて。震シンに似ニて弱ヨワし。例 衣イを千仞センジンの岡ヲカに振フルふ。振威シンキ 振怖シンキ 振氣シンキ 振起シンキ 振旅シンリョ 振作シンサク。  
 手テにて物モノをふり動ウゴすこと。振シンよりも弱ヨワし。例 指揮シキ 揮毫キガウ 涙ナミダを揮フルひて訣別ケツベツす。揮霍キワク。  
 身體シントウ 手足シユツなどの、ふる／＼とふるへること。例 手顛テフ 頭顛カシラフ 心顛ムネフ。  
 物畏モノオソれして、ふるふこと。例 戰慄センリツ 戰々センケン 競々キョウキョウ。

への部

【べし】

可<sup>カ</sup>當<sup>カウ</sup>宜<sup>イ</sup>應<sup>エイ</sup>須<sup>シュ</sup>

否<sup>ヒ</sup>の反對<sup>ハンタイ</sup>にて、許<sup>コ</sup>也、肯<sup>ケン</sup>也、と註<sup>チュウ</sup>す。心<sup>シン</sup>にたしはかりて定<sup>サダ</sup>むる意<sup>イ</sup>あり。又<sup>マタ</sup>命令<sup>メイレイ</sup>の意<sup>イ</sup>あり。④水深<sup>スイセン</sup>不可<sup>イカ</sup>渡<sup>ワタ</sup>。中朝<sup>チュウテウ</sup>舊<sup>キウ</sup>有<sup>ユ</sup>知<sup>チ</sup>音<sup>イン</sup>在<sup>ゼ</sup>、可<sup>カ</sup>是<sup>シ</sup>悠<sup>ユ</sup>々<sup>ツツ</sup>入<sup>ニ</sup>帝<sup>テイ</sup>鄉<sup>キョウ</sup>。理<sup>リ</sup>合<sup>カウ</sup>如<sup>ニ</sup>此<sup>コノ</sup>也<sup>ニ</sup>と註<sup>チュウ</sup>す。「カウアルハヅヂヤ」の意<sup>イ</sup>。④當<sup>カウ</sup>然<sup>ゼン</sup>正<sup>セイ</sup>當<sup>カウ</sup>。此<sup>コノ</sup>非<sup>ヒ</sup>人<sup>ニ</sup>臣<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>當<sup>カウ</sup>議<sup>ギ</sup>汝<sup>ニ</sup>當<sup>カウ</sup>努<sup>ニ</sup>力<sup>リキ</sup>。

當<sup>カウ</sup>也、適<sup>スル</sup>理<sup>リ</sup>也<sup>ニ</sup>と註<sup>チュウ</sup>す。「カウシタガヨイカラ」「カウセヨ」といふ意<sup>イ</sup>。④宜<sup>イ</sup>去<sup>キ</sup>。宜<sup>イ</sup>弔<sup>ニウ</sup>不<sup>フ</sup>弔<sup>ニウ</sup>宜<sup>イ</sup>免<sup>メン</sup>不<sup>フ</sup>免<sup>メン</sup>有<sup>ユ</sup>可<sup>カ</sup>罰<sup>バツ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

當<sup>カウ</sup>也、又<sup>マタ</sup>料<sup>リョウ</sup>度<sup>ド</sup>之<sup>ノ</sup>辭<sup>ジ</sup>と註<sup>チュウ</sup>す。畧<sup>リョク</sup>當<sup>カウ</sup>と同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>なれど、當<sup>カウ</sup>の如<sup>コト</sup>く理<sup>リ</sup>に當<sup>アタ</sup>るほどの意<sup>イ</sup>な

く、たゞ「ソノハヅヂヤ」といふ程<sup>ホド</sup>の意<sup>イ</sup>なり。④匹<sup>ヒツ</sup>夫<sup>フ</sup>發<sup>ハツ</sup>侮<sup>ウ</sup>諸<sup>シュ</sup>侯<sup>コウ</sup>者<sup>ヲ</sup>、罪<sup>ツミ</sup>當<sup>カウ</sup>誅<sup>シユ</sup>。用<sup>ヨウ</sup>也、待<sup>タイ</sup>也<sup>ニ</sup>と註<sup>チュウ</sup>す。下<sup>ゲ</sup>知<sup>チ</sup>する辭<sup>ジ</sup>になりて、當<sup>カウ</sup>の字<sup>ジ</sup>よりは強<sup>キョウ</sup>し。④須<sup>シュ</sup>來<sup>ライ</sup>。須<sup>シュ</sup>去<sup>キ</sup>。須<sup>シュ</sup>以<sup>ニ</sup>決<sup>ケツ</sup>事<sup>シ</sup>。

【へだつ】

隔<sup>カク</sup>阻<sup>ソ</sup>

阻 隔

【へつらふ】

佞 諛

【へる】

詔 諛 耗 減

【ほがらか】

物<sup>モノ</sup>と物<sup>モノ</sup>との間<sup>マヒ</sup>に、他<sup>タ</sup>の物<sup>モノ</sup>を入<sup>イ</sup>れて相<sup>アヒ</sup>遠<sup>トホ</sup>ざくるをいふ。④隔<sup>カク</sup>絶<sup>ゼツ</sup>。隔<sup>カク</sup>離<sup>リ</sup>。間<sup>カン</sup>隔<sup>カク</sup>。道<sup>ミチ</sup>路<sup>ロ</sup>山<sup>サン</sup>川<sup>セン</sup>のへだたること。④それより兩<sup>リウ</sup>者<sup>シャ</sup>の間<sup>マヒ</sup>を塞<sup>サシ</sup>ぎ止<sup>トド</sup>むる意<sup>イ</sup>に用<sup>ヨウ</sup>ゐる。④嶮<sup>クシ</sup>阻<sup>ソ</sup>。阻<sup>ソ</sup>隔<sup>カク</sup>。山<sup>サン</sup>阻<sup>ソ</sup>。賢<sup>ケン</sup>者<sup>シャ</sup>の路<sup>ロ</sup>を阻<sup>ソ</sup>つ。諫<sup>ケン</sup>を阻<sup>ソ</sup>つ。

佞<sup>ヘイ</sup>諛<sup>ユ</sup>詔<sup>シユ</sup>。相<sup>アヒ</sup>手<sup>テ</sup>の氣<sup>キ</sup>質<sup>シツ</sup>を知<sup>チ</sup>りて、喜<sup>ヨロ</sup>ばすこと。④便<sup>ベン</sup>佞<sup>ヘイ</sup>。佞<sup>ヘイ</sup>者<sup>シャ</sup>。奸<sup>カン</sup>佞<sup>ヘイ</sup>。利<sup>リ</sup>のため<sup>タメ</sup>に、心<sup>シン</sup>にもなきこと<sup>コト</sup>をいひて、人<sup>ヒト</sup>にへつらふこと。④面<sup>メン</sup>諛<sup>ユ</sup>。阿<sup>ア</sup>諛<sup>ユ</sup>。諛<sup>ユ</sup>言<sup>ゴン</sup>諛<sup>ユ</sup>辭<sup>ジ</sup>。

詔<sup>シユ</sup>に同<sup>ドウ</sup>じ。④譏<sup>キ</sup>詔<sup>シユ</sup>面<sup>メン</sup>諛<sup>ユ</sup>。詔<sup>シユ</sup>諛<sup>ユ</sup>の小<sup>セウ</sup>人<sup>ジン</sup>。減<sup>ケン</sup>耗<sup>カウ</sup>。加<sup>カ</sup>増<sup>ゾウ</sup>の反<sup>ハン</sup>對<sup>タイ</sup>。數<sup>スウ</sup>量<sup>リヤウ</sup>の以<sup>イ</sup>前<sup>ゼン</sup>より少<sup>シウ</sup>くなれること。④增<sup>ゾウ</sup>減<sup>ケン</sup>。減<sup>ケン</sup>少<sup>シウ</sup>。輕<sup>ケイ</sup>減<sup>ケン</sup>。數<sup>スウ</sup>量<sup>リヤウ</sup>の不<sup>フ</sup>足<sup>トク</sup>し行<sup>ユク</sup>きて、その不<sup>フ</sup>足<sup>トク</sup>せる分<sup>ブン</sup>は、消<sup>セウ</sup>滅<sup>メツ</sup>して無<sup>ム</sup>くなれること。④消<sup>セウ</sup>耗<sup>カウ</sup>品<sup>ヒン</sup>。

ほの部

朗<sup>ラウ</sup>廓<sup>クワク</sup>豁<sup>クワク</sup>洞<sup>ドウ</sup>

廓朗

うちひらけたること。明、開の二意を兼ね。例 高明、爽朗、開朗。廓朗に同じ、されど之れは、明、開の外に大の意をも兼ね。例 廓如、廓開、廓大、廓清。

豁

今まで塞りたるもの、忽ち開け通する意。例 豁然として大悟す。豁然として貫通す。

洞

行き抜けになること。例 洞見、洞察、識密にして、鑒も亦洞かなり。

誇

自慢することにも、事實以上に大きくいひ廣ぐるにもいふ。即ち大言を吐くこと。例 誇大、誇稱、誇言。

矜

我身の賢をほこること。氣ぐらゐの高きこと。己が功を稱揚すること。即ち手柄自慢なり。

伐

片鎌のほこなり。例 干戈を交ふ。長さ二丈にて、鎌のつきたるほこ。

矛戈

戈、矛、戟、槩、槩、ササ

【ほし】 槩 戟 星 辰

十文字のほこ。馬上にて使ふほこにて、長さ一丈八尺のもの。星、辰

夜に入りて、大空に輝くもの。例 流星、恆星、游星、彗星。日月所會謂之辰。とありて元來、星の宿る位置のことなるが、それより直ちに星の事に轉用す。例 北辰。

【ほし】 縱 恣 擅 横 放 肆

我心のまゝにて、氣儘勝手にするをいふ。例 縱覽、放縱、豪縱。悪事を氣儘にすること。例 横恣、驕恣。

專の意、一人にて事をほし、まゝにすること。例 君寵を擅にす、擅權。無理に我儘勝手を行ふこと。例 縦論、横議、專横、横行。

羈の反對、人の束縛を受けぬこと。締括なく「ヤリッパナシ」の意の時は、放逸、放恣など用ゐる。大膽にして、常規に拘泥せぬ意の時は、豪放、曠放など用ゐる。

【ほし】 放 蕩 放 談 放 論 放 言

肆

思ふ存分オモゾブンにすること。例 放肆ハウシ。鬪訟トウショウを肆ホレイマにす。揚墨ヤウボクは肆ホレイマに行ふ。

細

細サイのほそき意より、事物モノの上に轉用テンヨウせらる。例 細心サイシン。細密サイミツ。細説サイセツ。細君サイクン。細腰サイエウ。

織

精細セイサイ。細サイに似て、かよわき意イを含む。例 織弱オリヤク。織手オリテ。織月オリツキ。

殆

「アマフシ」とも訓む。事コトの危険キケンに近チカけるをいふ。「今少シイマオウシ」「スデノコトニ」など

幾

いふ意。例 危殆キタイ。沛公ハイコウは殆ホトドク天授テンジュなり。

側

近チカき意にて、殆タイに似て、其意弱ソノイヨクし。

畔

「ソバ」とも訓む。「片ワキ」の意。例 君側クニガタの姦カンを清キヨむ。

邊

田畑デンハタの境界サカイなるくろのことなり。それより河畔カハなど、ほとりの意イに用モチゐる。例 墓畔ボハタ。

邊

物のふち、又はきはをいふ。例 周邊シュヘン。水邊スイヘン。邊境ヘンキヤウ。

瀕 陲 頭

水ミヅのほとりをいふ。例 邊陲ヘンシ。國クニはづれの地チをいふ。例 邊陲ヘンシ。とりつきの所トコロをいふ。例 渡頭トトウ。

炎

火ヒの熾サカシに燃モゆること、それより熱ネツの烈ハゲしき意イに用モチゐる。例 炎上エンジョウ。炎焰エンエン。天テンに漲ミトギる。炎暑エンショ。炎熱エンネツ。炎天エンテン。炎威エンキ。

焰

火ヒの燃モえあがるさまをいふ。例 火焰クワエン。

粗

粗末ソマツと連用して、「アラマシ」の意イなれば、その大概ダイガイをいへること。

略

詳細シヤウサイの點テンをはぶきて、大體ダイタイ肝要カンエウの點テンを取トれること。

約

大抵ダイテイを荒括アラグクする辭コトバにて、「オホヨソ」と譯ヤクす。

譽

賞シヤウ。譽ヨ。褒ホウ。美ミ。讚サン。贊サン。稱ショウ。稱ショウ。頌ショウ。

賞

賞シヤウ。賞狀シヤウジョウ。賞詞シヤウジ。賞詞シヤウジ。賞觀シヤウケン。賞典シヤウテン。品ヒン。賞狀シヤウジョウ。賞詞シヤウジ。賞觀シヤウケン。賞典シヤウテン。

賞

賞シヤウ。賞狀シヤウジョウ。賞詞シヤウジ。賞觀シヤウケン。賞典シヤウテン。品ヒン。賞狀シヤウジョウ。賞詞シヤウジ。賞觀シヤウケン。賞典シヤウテン。

【ほり】 褒 譽 美 讚 贊 頌 稱 頌 頌 頌

毀の反對。其人のほまれとなるやうに、ほむること。例 名譽、聲譽、榮譽、毀譽、貶の反對。或は物品を興へ、或は言にてその功績をほめ、人の目に付くやうにする。例 褒美、褒貶、褒狀。

人の功績をよしとしてほむること。例 美談、美譽、美名、賞美、稱美、嘆美、其人の功績をほめて、世人に知らしむること。例 讚美、讚辭、讚詞、讚に同じ。

もてはやし慕ふ意。

人の功徳をほめて歌文などに作ること。例 頌徳碑。

吠 吼 咆 哮

犬のなく聲をいふ。その他も此に似たる者の聲を云ふ。

猛獸のなく聲なり。例 獅子吼、虎吼、鯨吼。

猛烈に吼ゆるをいふ。例 咆哮して止まず。

咆と同じ。咆哮と連用す。

漣 壕 隍 渠

【ほる】 壑 隍 壕 渠 鑿 鑿 鑿 鑿 掘 掘 掘 掘 滅 亡

要害をよくせんがために、城の周圍に設けたるほりをいふ。

壑の水のなきもの、稱、即ち「カラボリ」。

池の水なきもの、稱、要害などに關せず。

田島に灌漑のためか、又は運送の便のために設けたるほり。

鑿 鑿 鑿 鑿 掘 掘

ほりものをすること。例 玉人をして雕琢せしむ。

ほりもの、まあげをすること。例 琢磨、雕琢。

ほりつくること。

のみにて、ほること。うがつ(穿)とも訓む。

穴をほりうがつこと。例 井を掘る。

滅 亡 喪 泯

次第に衰へて、遂に消え失するをいふ。例 消滅、破滅、滅亡、討滅、寂滅、泯滅、族滅。

有又は存の反對。有りし物の無くなれること。死亡などいふ時は、此世に存在

泯喪

せぬことなれども、逃亡タウバウなどいふ時は、逃げかくれて、その處トコロに存ソンせずの意。故コに滅メツよりは其意弱ヨクし。例 存亡ソンバウ、亡失バウシツ、敗亡バイバウ、亡者マウジヤ、未亡人ミバウジン。滅亡メツバウし果つるをいふ。消滅セウメツして跡なきに至るをいふ。

まの部

【まがる】

曲キョク 枉ワウ 鈎コウ

幾つイツもまがりたること。それより物モノの入組イリクみたることに用モチゐらる。例 曲解キョクカイ。婉曲エンキョク、曲折キョクセツ、委曲ウヰキョク、懇曲コンキョク。

そりまがることにて、大きく一つの曲マカりをいふ。枉屈ワウクツの意にも用モチゐらる。例 冤枉エンワウ、枉駕ワウカ。

かぎなりに、まがりたること。

【まく】

負フ 輸シュ

勝負シヨウバウの反對ハンタイ。最も廣く用モチゐる。

【まこと】

輸シュ 誠セイ 信シン 眞シン 實ジツ 固コ 諒リョウ 洵ジュン

羸レイの反對ハンタイ。俗語ゾクゴには此字コノジを用モチゐて、負フの字ジを用モチゐず。誠セイ 信シン 眞シン 實ジツ 固コ 諒リョウ 洵ジュン 允イン 悃コン 僞キの反對ハンタイ。心の底ソコより出イでたる飾カサりのなきまごころをいふ。例 誠意セイイ、誠心セイシン、誠實セイジツ、至誠シセイ、忠誠チュウセイ。

言語ゲンゴの上に、僞イツなきをいふ。それより約束ヤクソクの事コトをも信シンといふ。例 信義シンギ、信實シンジツ、信言シンゲン美ならず。通信ツウシン、音信インシン。

假カ、贗ガン、妄マウの反對ハンタイ。誠セイは人の心ココロに付ツきていへど、眞シンは物の質シツに付ツきて、まらかひのなきことにいふ。例 眞實シンジツ、眞偽シンギ、眞如シンニョ、天真爛漫テンシンランマン、眞理シンリ。

虚キョの反對ハンタイ。「ミソリ」とも訓ヨみて、實ジツの十分ジュンブンにいることなり。性行セイカウの上ウヘには用モチゐずして、道理ダウリ上ジヤウにのみ用モチゐる。例 實行ジツカウ、實際ジツサイ、篤實トクジツ、實踐ジツケン、實地ジツチ、實用ジツヨウ。

相手アヒテの語ゴを受けて、もとより然シカりとの意イに用モチゐらる。固コく約ヤクを守モること。信シンと實ジツとに通用ツウヨウせらる。信シンと同義ドウギなり。くれぐれもといふ如ゴトく、繰反クリカヘす意イあり。又マタ歎美タンビの意イあり。例 洵ジュン美ニシテ且ツ仁ナリ。

允 悃

信シンと同義なり。いかにも、といふ程の意。例 允文。允武。允非。小子之所能及也。心のたけを盡す意。

【まの部】

正 當 方 將 且

邪道ジャダウへ行かず、正しく真向マムキなる意にて、道理上ドウリジョウかくあるべき筈ハズとの意。當然タウゼンカ斯くあるべき筈との意。事の最中コトにて、眞盛マツナカりなる時をいふ。戰方ケンハに酣タケナハなりといふ時は、戰爭センサウの最中をいふ。

既キの反對ハンタイ。今少し時を經ヘばの意。「オツツケ」「ヤガテ」などいふに當アタる。將シャウに似ニて、其意強キツく急キツなり。

【あひはる】

優 勝 愈 賢

劣オトルの反對ハンタイ。力の餘りあることにて、「ユルリ」として迫セマらざる意。例 優待イウタイ。優遇イウグウ。負フの反對ハンタイ。人の上ウヘに出イづること。勝也シヨウ。賢也ケンナリ。過也クワナリと註チユウす。彼カレよりも、此コレがましなる義ギなり。優勝イウショウ。

賢

【まじはる】

愚グの反對ハンタイにて、たちあがること。交カウ 雜ザツ 參サン 錯サツ 混コン

二個ニゴの物體ブツタイありて、其兩端ソノリヤウワンの入りまじること。例 交叉カウサ。交際カウサイ。犬牙ケンガ相交アイマシハる。臂ヒデを交マシへて語る。

純一ジュンイツの反對ハンタイにて、多數タスウの物モノの入りまじること。例 雜駁ザツバク。蕪雜ブザツ。雜兵ザツヒヤウ。雜炊ザツフスネ。二個ニゴ若ニコしくは、多數タスウの物モノの間に插アヒまりて、其ソレと同列ドウレツになること。例 參政サンセイの權ケンを得ヲ。參議サンギ。天地テンチに參マシりて、その化育カイクを贊タスく。參謀官サンボウクワン。

入り違チガふ意。例 錯亂サクラン。錯雜サクザツ。錯誤サクゴ。入りまじりて、見分けミワケのつかぬこと。例 混入コンニフ。混合コンガフ。混一コンイツ。混雜コンザツ。

【ます】

増 益 滋 倍

減ゲンの反對ハンタイ。階級カイキフを上ノボして多オホくすること。例 増俸ゾウホウ。増給ゾウキフ。増兵ゾウヘイ。増加ゾウカ。増額ゾウガク。増水ゾウスイ。増員ゾウキン。

損ソンの反對ハンタイ。利益リエキのあるやうに増加ゾウカすること。例 益友エキユウ。純益ジュンエキ。増益ゾウエキ。有益イウエキ。公益コウエキ。ますくとも訓ヨむ。雜草ザツサウなどの多オホく繁シゲり生シヤウずる意。はびこる意をも含む。



【また】倍

五倍十倍などいふ如くますます意。

又亦復還

其上またの意。あるがうへに重ねること。例山又山。角力を見又芝居を見る。「モマタ」といふ意。詩も好めば歌も亦好む。月もよし、花も亦よし。など用ゐる。

復

同一の事を二度繰りかへすに用ゐる。復戦ふといへば、二度同じやうに戦ふこと。復戦はずといへば、同じ戦を二度繰りかへさぬをいふ。

還

循環の義にて、めぐり歸する意より、「マタ」の辭となる也。管子に還四年伐孤竹。神龍失勢、即環與蚯蚓同。隗囂の傳。

【ま】待

待 俟

確に來る人、又は起るべき事件を豫期してまつ意。例期待、待時、相待、接待、待遇。

自然の成行きをまつ時。又は何時來るか、又果して來るや否や疑しきをまつに用ゐる。例人事を盡して天命を俟つ。後の識者を俟つ。

俟

【まつし】貧

貧 窮

無財也と註す。富の反對なり。例貧窶、赤貧。

窮

極也と註す。何事にも手づまることにて、財産の事に限らず。例窮危、窮困、窮鬼。

【まつたし】完

完 全

缺くる所なき意。一事物に付きて、缺損の處なきをいふ。例完美、完成、完了。

全

完璧、完備、完結、完全。具足して、殘る所なき意。多數の事物の揃へるをいふ。例全部、大全、全文、全般、全軍、全滅、全盛、全美、全篇、全市、全世界。

【まつり】祭

祭 祀

春のまつり、秋のまつりといふやうに、時を定めて神をまつるをいふ。又何時に限らず、物をそなへて祭る意にも用ゐる。例祭式、祭禮、祭典。

祀

定まりたるまつりをいふ。神社を建て、その中にまつる意。例合祠、淫祠。

祠

【まよふ】

纏絡 紆

纏イト絡ラック 紆フ  
糸にて、きり／＼とまくこと。例 纏結。纏束。

からまり、まとふこと。皆間のすきたる意あり。例 絡車（絲ヲトル）。絡頭（馬ノオ）。連絡。

もつるゝこと。文選に我思鬱以紆。

守 護 衛

守 護 衛

見張りをする、見詰むる、など目を放たずして見ること。例 守備隊。守衛。國守。看守。

大切に防ぎまもること。例 保護。護衛。擁護。擁護。守護。庇護。看護。周圍を取巻きて、番をすること。例 衛士。衛戍。衛兵。守衛。

迷 惑

行く道の分らずして、途方にくるゝこと。例 迷信。迷路。迷離。昏迷。「マドフ」と訓む。是非の判断のつかずして、心の決しがたきをいふ。例 疑惑。不惑の年。當惑。迷惑。誘惑。

【まらうご】

賓 客

上客の事なり。又上客ならずとも、客として厚くもてなさるゝ人をいふ。外より来るものをいふ。例 過客。旅客。寄客。食客。賓客。顧客。稀罕。

稠の反對にて、疏（まばら）なるをいふ。例 稀薄。稀少。「ヨリ／＼」時々「タマ／＼」などの意。例子罕に利を言ふ。

丸 團

まるき、球體をいふ。大小通じて用ゐる。例 丸藥。丸吞。鉛丸。丸木橋。丸木船。丸柱。

方の反對。物に角のなきこと。例 圓滑。圓轉。圓滿。圓球。圓座。圓柱。まるめ集めたるもの。例 團聚。團々たる明月。團樂。團隊。團扇。大團圓。

【まをす】

申 白

伸と同音にて、のべ告ぐること。例 申請。申告。上申。申達。明白にまをすにて、あからさまにのぶること。例 告白。敬白。

【まれ】

稀 罕

稠の反對にて、疏（まばら）なるをいふ。例 稀薄。稀少。「ヨリ／＼」時々「タマ／＼」などの意。例子罕に利を言ふ。

【まろし】

丸 團

まるき、球體をいふ。大小通じて用ゐる。例 丸藥。丸吞。鉛丸。丸木橋。丸木船。丸柱。

方の反對。物に角のなきこと。例 圓滑。圓轉。圓滿。圓球。圓座。圓柱。まるめ集めたるもの。例 團聚。團々たる明月。團樂。團隊。團扇。大團圓。

【まをす】

申 白

伸と同音にて、のべ告ぐること。例 申請。申告。上申。申達。明白にまをすにて、あからさまにのぶること。例 告白。敬白。

【まをす】

申 白

伸と同音にて、のべ告ぐること。例 申請。申告。上申。申達。明白にまをすにて、あからさまにのぶること。例 告白。敬白。

【まをす】

申 白

伸と同音にて、のべ告ぐること。例 申請。申告。上申。申達。明白にまをすにて、あからさまにのぶること。例 告白。敬白。

まの部 まらうご まれ まろし まをす

奏 稟 啓

臣下の天子に申上ぐること。例 上奏。奏聞。  
下の者が、上の者に申上げて其指揮を受くること。例 稟請。稟申。  
口を開きて申述ぶる意より、言上の義とす。例 啓上。拜啓。

みの部

【み】

身 躬

身體をいふ。

自分での意。時には、身躬通用することあり。

【みことり】

詔 勅

臨事の大事に書せらるゝみことりのり。

尋常の小事に書せらるゝみことりのり。

溝 渠 洫

ほりのことなり。禮記に城郭溝池、以爲固。

みぞとも、ほりとも訓む。

【みぞ】

渠 溝

【みだりに】

洫

田開の水道をいふ。水はきのために、設けたるみぞ。

妄 猥 濫 漫 叨 浪

輕卒にすること。無暗にすること。例 妄動。妄作。妄語。

他人の輕蔑を受くるをも顧みずしてすること。例 鄙猥。煩猥。猥雜。

爲すまじきことを、手當り次第にすること。例 濫伐。濫用。濫刑。濫賞。

筋道の明ならぬこと。あてのなきこと。例 漫言。漫筆。漫録。漫然。

思ひかけずの意。取締りのなきこと。浪費。孟浪など、連用す。

【みだる】

亂 擾 紊 紛 攪 淆

治の反對不秩序、不正整なること。例 國亂。亂邦。動亂。亂髮。爭亂。内亂。戰

亂の意と、煩雜の意とを兼ねたり。「ゴダク」すること。例 騷擾。紛擾。塵寰

擾々。多數の物の、亂雜して、條理のたぬこと。例 紊亂。

紊 擾

紛攪淆道途徑充實

紛 案に似て、結ばるゝ意を含む。  
攪 掻きみだすの意。一物の中に或物の入り来りて、掻きまはし、亂す意。  
淆 水の濁ること。「殺」と通用す。  
道 道。路。途。徑。

道 人のあるくみちにて、大小通じて用ゐらる。それより、人の行ふべき筋道をいふ。  
道 大道。街道。天道。道德。邪道。

途 道の如く大小共に通用す。されど路は道の一部分を指すこと多し。又轉じて人生の上にも用ゐる。  
途 末路。世路。行路難。路頭。大路。小路。路上。路傍。

徑 小道なり。此處より彼處までの路筋をいふ。又轉じて事の始終の間をいふ。「塗」と書くも、音義相同じ。  
徑 半途。中途。途次。途上。歸途。

充 細きみちにて、細路といふに同じ。  
充 實。滿。盈。

實 空處なきまで、物を詰込むこと。  
實 充實。補充。充大。充滿。充塞。  
虚の反對。物の中に一杯入りて、確なる意。  
實 確實。充實。

滿盈自親躬翠綠

滿 缺の反對。物の中に一杯にみつること。  
滿 正氣天地に滿つ。酒杯に滿つ。滿月。滿潮。滿面。滿場。滿腔。滿開。圓滿。引滿。  
盈 縮又は虧の反對。次第にみちゆくこと。  
盈 盈虧。盈滿。盈虛。

自親躬 他に對する語。人手を假らぬこと。  
自親躬 自身。自己。自分。自活。自動。  
「シタシク」とも訓む。「實地に」又は「まのあたり」の意。  
自親躬 親任。親閱。親展。親兵。

躬 己が身を以てすること。  
躬 躬行實踐。朕躬后土を祭る。

翠綠 もえぎ色なり。詩經に、綠竹猗々。  
翠 翠色。

綠 「ルリ色」なり。  
綠 翠色。  
空色なり。  
綠 水碧に、沙明かなり。

皆 皆 咸。僉。ある限り残らずの意。  
皆 悉皆。皆無。

咸 僉

咸ホウカイ 僉オナ 皆に同じ。廣大の意に用ゐる。例 咸其德を一にす。天下咸服す。

峯 嶺 岑

峯ホウナガ 嶺トガ 岑ヤマ 細長くして尖りたる山をいふ。

山の頂上をいふ。

小高き山をいふ。

見

見ケン 視シ 觀クワン 覽ラン 看カン 瞻セン 睹ト 相サウ 瞰カン 覲ケン

目に觸るゝことにて、此方より求めてみるにあらず、自然と見えてくるをいふ。

例 見聞 拜見 瞥見 望見 見識 卓見 隱見 閔見

此方より心をとめてみることに。例 視聽 視察 蔑視 輕視 近視眼 熟視 正視

直視 眇視 睇視 諦視

喜びてみる。考察して仔細にみる等の意。例 觀月 觀梅 觀客 觀察 壯觀 大觀

主觀 客觀 洞觀 參觀

一通り目を通す意。例 博覽 一覽表 遊覽 乙夜の覽 天覽 聖覽 上覽 電覽

覽

觀

視

見

峯

嶺

岑

峯

嶺

岑

周覽

目の上に手をかざしてみる。思案して、見つむる意。例 看護 看守 看破 看病

仰ぎみる意。例 彼の日月を瞻る。瞻望 瞻仰

見に似て稍や重し。

互に相見る意。例 生きて是の感を観んよりは、死するに若かじ。

觀の古文字。例 此れ大人の親しく睹る所に非ずや。

様子を見、又は善惡を見定むること。例 人を相す。地を相す。

俯きてみおろす意。例 俯瞰 下瞰

下の人の上の人にまみゆる意。例 朝觀

むの部

看 瞻 覲 睹 相 瞰 觀

【むかふ】

迎 向

向カウ 迎ガイ 邀エウ 鄉キヤウ 嚮キヤウ 對タイ 逆ガク 逆キヤク

背の反對 目的の方へ、正しくむくこと。

送の反對 來るに先きだちて。此方より出でむかふること。例 歡迎 迎謁 送

邀 郷 嚮 對 迓 逆 報 酬 酢

迎<sup>グイ</sup> 來<sup>キタ</sup>る者<sup>モノ</sup>を、強<sup>シ</sup>ひて遮<sup>サヘ</sup>り出<sup>イ</sup>でむかふること。即<sup>スナハ</sup>ち、此<sup>コナ</sup>方<sup>タ</sup>より待<sup>マ</sup>ち設<sup>テ</sup>けて出<sup>イ</sup>で迎<sup>ムカ</sup>ふる事<sup>コト</sup>。例<sup>レ</sup>邀<sup>エウ</sup>撃<sup>キ</sup>。駕<sup>ガ</sup>を邀<sup>ムカ</sup>へて上<sup>ジヤウ</sup>言<sup>ゲン</sup>す。杯<sup>ハイ</sup>を舉<sup>ア</sup>げて、明<sup>メイ</sup>月<sup>ゲツ</sup>を邀<sup>ムカ</sup>ふ。向<sup>カウ</sup>と同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>なり。書<sup>ショ</sup>經<sup>キヤウ</sup>に、若<sup>ニ</sup>火<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>燎<sup>ラウ</sup>于<sup>ニ</sup>原<sup>ゲン</sup>、不<sup>ラ</sup>可<sup>カ</sup>郷<sup>カウ</sup>邇<sup>ニ</sup>。向<sup>カウ</sup>と同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>なり。禮<sup>レイ</sup>記<sup>キ</sup>に、南<sup>ナン</sup>嚮<sup>カウ</sup>而<sup>ニ</sup>立<sup>ツ</sup>。さしむかふこと。杜<sup>ト</sup>詩<sup>シ</sup>に、山<sup>サン</sup>危<sup>キ</sup>一<sup>イツ</sup>徑<sup>キョウ</sup>盡<sup>ジン</sup>、岸<sup>アン</sup>絕<sup>ケツ</sup>兩<sup>リウ</sup>壁<sup>ヘキ</sup>對<sup>タイ</sup>。相<sup>サウ</sup>迎<sup>イウ</sup>也<sup>ヤ</sup>と註<sup>チュ</sup>す。雙<sup>サウ</sup>方<sup>ハウ</sup>より出<sup>イ</sup>で迎<sup>ムカ</sup>ふる意<sup>イ</sup>あり。道<sup>ミチ</sup>まで出<sup>イ</sup>で迎<sup>ムカ</sup>ふること。報<sup>ハウ</sup>酬<sup>シウ</sup>酢<sup>サク</sup> 復<sup>フク</sup>答<sup>タ</sup>の意<sup>イ</sup>にて、俗<sup>ゾク</sup>にいふ返<sup>ヘン</sup>報<sup>ポウ</sup>なり。恩<sup>オン</sup>怨<sup>エン</sup>共<sup>キョウ</sup>に用<sup>モチ</sup>ゐる。例<sup>レ</sup>報<sup>ハウ</sup>復<sup>フク</sup>。報<sup>ハウ</sup>答<sup>タ</sup>。報<sup>ハウ</sup>知<sup>チ</sup>。報<sup>ハウ</sup>告<sup>コク</sup>。獻<sup>ケン</sup>酬<sup>シウ</sup>と連<sup>レン</sup>用<sup>ヨウ</sup>して。客<sup>キヤク</sup>に杯<sup>ハイ</sup>をさすことを獻<sup>ケン</sup>といひ、客<sup>キヤク</sup>より主<sup>シュ</sup>人<sup>ジン</sup>に返<sup>ヘン</sup>杯<sup>ハイ</sup>するを酬<sup>シウ</sup>といふ。それより何<sup>ナニ</sup>にてもかへす義<sup>ギ</sup>に用<sup>モチ</sup>ゐる。多<sup>オホ</sup>くは善<sup>ゼン</sup>には善<sup>ゼン</sup>を、惡<sup>アク</sup>には惡<sup>アク</sup>をかへすにいふ。再<sup>サイ</sup>び返<sup>ヘン</sup>杯<sup>ハイ</sup>する意<sup>イ</sup>。酬<sup>シウ</sup>酢<sup>サク</sup>と連<sup>レン</sup>用<sup>ヨウ</sup>す。それより應<sup>オウ</sup>對<sup>タイ</sup>の事<sup>コト</sup>に轉<sup>テン</sup>用<sup>ヨウ</sup>す。

【むさぼる】 貪 婪 饕 餮 饕 餮 蝕 蠹 【むせぶ】 咽 噎 哽 哽 【むち】

貪<sup>コン</sup> 婪<sup>ラン</sup> 饕<sup>タウ</sup> 餮<sup>テウ</sup> 饕<sup>タウ</sup> 餮<sup>テウ</sup> 蝕<sup>シヨク</sup> 蠹<sup>コ</sup> 【むせぶ】 咽<sup>エツ</sup> 噎<sup>エツ</sup> 哽<sup>エツ</sup> 哽<sup>エツ</sup> 【むち】 鞭<sup>ベン</sup> 笞<sup>チ</sup> 策<sup>サク</sup> 箠<sup>スキ</sup> 櫛<sup>タ</sup> 貪<sup>コン</sup> トシ、婪<sup>ラン</sup> トシ、饕<sup>タウ</sup> トシ、餮<sup>テウ</sup> トシ 慾<sup>ヨク</sup>深<sup>シ</sup>き意<sup>イ</sup>。飽<sup>オ</sup>くまでほしく思<sup>オモ</sup>ふこと。大<sup>ダイ</sup>食<sup>シヨク</sup>の意<sup>イ</sup>より轉<sup>テン</sup>じて、財<sup>サイ</sup>貨<sup>ワ</sup>をむさぼることに用<sup>モチ</sup>ゐる。饕<sup>タウ</sup>と餮<sup>テウ</sup>同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>なり。蠹<sup>コ</sup> トシ、蝕<sup>シヨク</sup> トシ 蝕<sup>シヨク</sup> くひになること。内<sup>ウチ</sup>より食<sup>クラ</sup>ひかくる意<sup>イ</sup>。例<sup>レ</sup>國<sup>コク</sup>家<sup>カ</sup>の蠹<sup>コ</sup>賊<sup>ゾク</sup>。蝕<sup>シヨク</sup> くひになる義<sup>ギ</sup>は蠹<sup>コ</sup>と同一<sup>ドウ</sup>なれど、これ<sup>コト</sup>は外<sup>ソト</sup>より食<sup>クラ</sup>ひかくる意<sup>イ</sup>あり。例<sup>レ</sup>蠹<sup>コ</sup>蝕<sup>シヨク</sup>。日<sup>ニツ</sup>蝕<sup>シヨク</sup>。月<sup>ゲツ</sup>蝕<sup>シヨク</sup>。咽<sup>エツ</sup> 噎<sup>エツ</sup> 哽<sup>エツ</sup> 哽<sup>エツ</sup> 咽<sup>エツ</sup> 喉<sup>コ</sup>に物<sup>モノ</sup>の、こたはること。例<sup>レ</sup>鳴<sup>メイ</sup>咽<sup>エツ</sup> (ムセビ)。哀<sup>アイ</sup>咽<sup>エツ</sup> (上<sup>ジョウ</sup>ニ)。咽<sup>エツ</sup> と同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>。例<sup>レ</sup>中<sup>チュウ</sup>心<sup>シン</sup>噎<sup>エツ</sup> ぶが如<sup>ゴト</sup>し。鬱<sup>ウツ</sup> 噎<sup>エツ</sup>。畧<sup>リョク</sup>咽<sup>エツ</sup> と同<sup>ドウ</sup>義<sup>ギ</sup>。例<sup>レ</sup>哀<sup>アイ</sup>哽<sup>エツ</sup>。悲<sup>ヒ</sup>哽<sup>エツ</sup>。鞭<sup>ベン</sup> 笞<sup>チ</sup> 策<sup>サク</sup> 箠<sup>スキ</sup> 櫛<sup>タ</sup>

むの部 むさぼる むしはむ むせぶ むち

鞭 笞 策 篁 櫪 【むなし】 空 虚 曠 曠 村 【むら】 邑 落

革カにて作ツクれるむち。  
 竹タケのむちにて、人ヒトを打ウチ懲コラすに用モチゐる。  
 竹タケのむち、馬ウマを勵ハゲますために用モチゐる。  
 人ヒト又は馬ウマをうウマつ竹タケのむち。  
 木キにて作ツクれるむち、人ヒトを打ウチ懲コラすに用モチゐる。  
 空クウ 虚キヨ 曠クワウ  
 有イウの反ハン對タイ。中ナカに一イチ物ブツもなナきこと。即スナハちかカラのことなり。例サイクワムナ財サイ貨クワ空ムナし。朝テウ廷テイ空ムナし。  
 田デン野ヤ空ムナし。空クウ山サン。空クウ谷コク。空クウ論ロン。空クウ言ゲン。空クウ理リ。空クウ拳ケン。空クウ宅タク。  
 實ジツの反ハン對タイ。中ナカに少シウしく物モノはあアれども、充チウちてあアらぬこと。故ユエに空クウよりは、その  
 意イ弱ヨウし。例タイキヨ大タイ虚キヨ。虚キヨ心シン。虚キヨ病ビョウ。虚キヨ空クウ。虚キヨ實ジツ。  
 日ヒをむムだに費ツヒヤすこと。例クワウジツ曠クワウ日ジツ彌ミ久キウ。曠クワウ官クワンの誹フシ。  
 村ソン 邑イフ 落ラク  
 古文コブンには皆ヒナ邑イフの字ジを用モチゐたり。後コウ世セイにては、邑イフは都ト邑イフのことにて、村ムラよりも繁ハン華ワなる處トコロの意イに用モチゐる。

落

居也ヒトと註アツマす。人ヒトの聚アツマり居カる所トコロ。例ソンラク村ムラ落ラク。聚ジュ落ラク。

めの部

【め】 目

目モク 眼ガン

眼ガン 眼ガン 球キウ等トウを合アハせて目メといふ。例モクソウ目メ送ソウ。目モク笑セウ。

目メ中ナカの黒クロ白シロの處トコロを眼ガンといふ。例ハクガン白ハク眼ガン。青セイ眼ガン。斜シヤ眼ガン。

【めぐる】 眼 目

巡ジュン 廻クワイ 繞ネウ 遠ネウ 周シウ 旋セン 運ワン 轉テン 匝サウ 榮エイ 匯ワイ

注意チュウイして視シまはるハること。例ジュンサツ巡ジュン察サツ。巡ジュン視シ。巡ジュン行カウ。巡ジュン査サ。巡ジュン狩シユ。巡ジュン覽ラン。

水スイの渦ウズ卷マくが如ゴトく、幾イクタビ度ももぐるク。まはるハること。「回カ」と書カくも音オン義ギ相アヒ同オナじ。例

廻クワイ章ヤウ。巡クワイ廻クワイ。回クワイ天テン動ドウ地ヂ。回クワイ想サウ。起キ死シ回クワイ生セイ。回クワイ復フツ。

物モノの周シウ圍キをつき纏マひめぐるクこと。例クワイ圍クワイ繞ネウ。纏マ繞ネウ。

繞ネウと同ドウ字ジなり。

隅スミから隅スミまで、一ヒトまはりする意イ。「週シウ」と書カくは俗ソク字ジなり。例シウユウ周シウ遊ユウ。周シウ行カウ。周シウ覽ラン。

周シウ圍キ。周シウ匝サウ。

旋 運 轉 匝 榮 匯 召 徵 辟 聘

**旋** チユウジン 中心ありて、くるくるとまはること。例 旋風、螺旋、旋行、旋毛、旋轉、周旋、次より次へ移りゆくこと。例 世運、氣運、運命、運轉、運行、天運、日月の運行、四時の運行。

**轉** シヤリン 車輪のめぐるをいふ。例 自轉車、輾轉、反側す、轉任。

**匝** モトサフ 物の外圍をめぐりすること。匝は元匝の俗字なれども、今普通に此を用ゐる。

**榮** カワルキコレ からむこと。例 葛藟之を榮る。

**匯** リツサキ ナガ 水の先へ流れず、跡へもどりて、外の水に合するをいふ。

**召** セウ ナヨウ ウエキ 徵 辟 聘 口にて呼ぶにも、手、又は使にて呼ぶにも用ゐる。例 召喚、召集。

**徵** テン シ 天子より召さるゝこと。年貢など取り立つるにも用ゐる。例 徵兵、徵證、役人より呼び出すこと。

**辟** シヤヘイハク 使者幣帛を以て、呼び迎ふること。例 招聘、厚聘、聘禮。

もの部

【もし】

如 若 儻

【もって】

以 儻 若 如

將

如 若 儻 假設或は未定の辭にて、是の如きことが、假にありとせばの意。如に同じ。されど、もしくははと訓む時は、「或」といふに同じ。或は然る時は、の意にして、俗に「フトサウナレバ」、或は萬一といふに同じ。以 用 將 庸 「もって」は、もて、又はもちて、の音便なり。持は、手に物をもつこと。有は金錢などを所有する意。保は、城、國、家などをもつ意にて、いづれも以とは異なり。以はデと譯す。例 忠信以得之、溫良恭儉讓以得之、事之以禮葬之以禮。

此の字は元來、「モチフ」又は「モチキル」と訓じて、實語なれども、以の如く助語に用ゐることあり。以よりは意強し。例 戒之用休、董之用威、以德若彼、用力如此。

詩語、俗語に用ゐて、畧以の字に似て、其意狹し、「ナガラ」と譯す。例 吟將來、



庸

【もつとも】

最尤

吟將去。用に通じ用ゐる。

第一番にすぐれたるものをいふ。例最上。最大。最後。最終。最末。最近。最初。

尋常よりすぐれたるもの、意。例尤物。

【もつはら】

專純

「もつはら」は、もはらの音便なり。物の一筋にて、二つ三つに分れぬこと。例專門。專使。專志。

一色也と註す。無紋無地のことにて、雑の反對。例純白。純粹。純金。

一にして、雑らず分れぬ意。例專一。純一。一色。

玩弄

【もてあそぶ】

一

愚み物にすること。「翫」と書くも同じ字也。例奇玩。珍翫。玩味。玩山水。

なぶりものにする事。例愚弄。嘲弄。弄臣。戲弄。

【もこ】

本原 元素 舊 故 固

本 原 元 素 舊 故 固 求 索 覓

末の反對。樹木の根に近き處をいふ。例本末。本質。本來。本務。本堂。本心。本邦。本山。

水の源の意。事物の濫觴を尋ねていふ詞。例原理。原料。原始。原由。原稿。原語。原因。

始、首の意。元旦。元日。元年など用ゐる。例平素。元素。

もとよりとも訓む。白き帛のことにて、下地からといふに同じ。例素養。質素。素志。素懷。素願。

新の反對。まへかたの意。過去の時を指す。例舊聞。舊知。故舊。舊慣。舊習。

舊の意に同じ。故人。故舊など用ゐる。例素養。質素。素志。素懷。素願。

もとよりと訓む。まことにとも訓む(其條を看よ)前々より、勿論などの意。

求 索 覓 需 干 徼 要

探求。請求。尋求。尋求等廣く用ゐらる。例要求。購求。

尋ねもとむる意にて、求よりは狭し。例搜索。探索。

探しもとむることなれども、少量の物をもとむるに用ゐる。「覓」と書くは俗字

【もとる】 需 干 徼 要

なり。  
無くてはならぬと、待ちもとむる意。故に、まつとも訓む。【徼】需用。軍需。を、かすとも訓む。強ひてもとむる意。【干】其不可然且至、則是干澤也。孟子。まらうけて、ねらひをる意。【要】小人行險、以徼幸、中庸。畧徼に同じ。【徼】路に要す。其天爵を修めて、以て人爵を要む。

【もつる】 悖 戾 很 悖

悖、戾、很、悖、強く逆らふこと。【悖】悖德、悖理、悖逆、悖禮。和の反對。ねち曲る意。【戾】背戾、乖戾、違戾、悖戾、暴戾。人の言ふことに反對して争ふこと。「狼」と書くは俗字。剛情にて、人の意見に従はぬこと。【很】剛愎、諫に悖る。

【も】 者 復 很 悖 悖 者

動物の代名詞。特に多くは人間を指す時に用ゐる。又上文の事物を承けて指す意の時、その指す所に随ひて、「コト」「トコロ」「ハ」など讀む。【仁者】勇者。漁者。從者。侍者。長者。賢者。使者。

物

【もろし】 脆 監

動物以外のものをいへど、時としては、宇宙間一般のものを指していふことあり。【監】遺物。財物。景物。物價。物論。物議。物質。物産。物名。人物。脆、監、小弱易絶と註す。堅固ならず、こはれ易き意。【脆】脆弱。脆に同じ。詩經に、王事靡監。

やの部

【や】 乎 哉 耶 居

乎、哉、耶、居、【や】「カ」「カナ」など訓ず。疑問の辭とも、咏歎の辭ともなる。尙「か」の條を看よ。【や】とも「カ」とも訓ず。咏歎の辭。【や】「カ」二つの訓あり。疑問の辭尙「か」の條を看よ。物をするつけていふ時に用ゐる辭「リアルゾ」と譯す。詩經に、日居月居云々とあり。

【やく】 燒 焚 燎 灼

燒、焚、燎、灼

焼 焚 燎 灼

火を或物體に付くるをいふ。焼けるものより、他に燃え移ること。即ち延焼することなり。燃え付くこと。

【やしなふ】

あぶりてやくこと。  
養 鞠 畜 育

動物物を生立つやうに、育つること。例 養育 培養 養育

養に同じ。されど、抱き上げて育つる意あり。例 鞠育 鞠養

禽獸を飼ひやしなふこと。尙、かふの條を參看すべし。例 牧畜 家畜 畜生

はぐくみ、そだつること。例 愛育 育兒 教育 飼育 生育

【やす】

瘦 瘠

肉の少くなれること。廣く用ゐらる。例 瘦削

肥の反對、瘦中の甚しきことにて、やせ疲れたるをいふ。例 瘠土 肥瘠

【やすし】

安 寧 康 泰 易 緩

危の反對、危げなく、穩に落付きたるをいふ。最も廣く用ゐらる。例 安堵

安

寧 康 泰 易 緩

安心 安意 安穩 安危 安泰 安樂  
安らかに定まる意。例 安寧 寧處  
安と樂との字を兼ね。例 安康 康寧  
安に寛大の義を兼ね。例 泰平 安泰  
難の反對、事物の爲しやすきこと。例 容易 簡易 平易 難易  
乗車せる時、執る所の繩なり。之を執れば倒れずして安し。故に安堵の意に用ゐる。例 緩撫

【やすひ】

備 雇

人に雇役せられて、賃錢を受くること。例 傭耕

備に同じ。

【やすむ】

宿 舍 次

やどとして住居すること。旅寐すること。例 宿泊 旅宿 止宿  
家屋の義轉じて止宿の義に用ゐる。例 舍營 官舍 寄宿舍 塾舍  
幾夜もとまること。左傳に、再宿曰信、三宿以上曰次。

【やなぎ】

楊柳

枝の上方に向ひて立てるやなぎをいふ。

枝の下方へ垂れたるもの。まただれやなぎのこと。楊柳と連用する時は、只やなぎの意となる。

【やはらか】

柔軟和

剛の反対。人の氣質性情のやはらかなるにいひ、それより金石樹木などにもいふ。例 柔弱 柔順。

硬の反対、柔の外に弱の意を兼ね。例 軟弱 柔軟 軟化。軟風。

和

「やはらかなること」、「静まること」。例 平和 和合 和解 溫和。

敗

敗破 敗壞

成又は勝の反対。いつとはなしに漸々やぶる、こと。例 敗軍 敗走 優勝劣敗。

敗亡 失敗 敗績 敗衄 敗滅 敗北 腐敗。

急に物をうちわりやぶること。例 破竹の勢 破滅 破損 破談 破顔 破倫 説

【やぶる】

破

徹

破。看破。破天荒。破産。破壊。破獄。完の反対。衣服などの、古びてやぶれたるをいふ。例 徹れたる縵袍 徹衣 徹履 勞敵。

壞

くづれこはる、意。例 崩壞 壞亂 破壞。

疾

疾に發れるやまひをいふ。

疫

流行病をいふ。例 時疫 疫病 惡疫。

痾

永びける病をいふ。例 宿痾 沈痾。持病にて、容易になほらぬやまひ。例 痾疾。

止

止已息 罷歇 休 輟。行の反対。とまること、とどむること。例 廢止 禁止 停止 中止。

息

やみ絶ゆること。例 止息 絶息。

【やまひ】

疾に發れるやまひをいふ。

疾の重くなれるをいふ。

流行病をいふ。例 時疫 疫病 惡疫。

永びける病をいふ。例 宿痾 沈痾。

持病にて、容易になほらぬやまひ。例 痾疾。

止已息 罷歇 休 輟。

行の反対。とまること、とどむること。例 廢止 禁止 停止 中止。

事を果し、こと。事を終りしこと。

やみ絶ゆること。例 止息 絶息。

罷 歇 休 輟 【やもめ】 寡 孀 嫠 稍 【や】 良 寢 較

とむる、畢る、廢棄等の意。【例】罷免。罷業。とざる、こと。【例】閒歇。

休息。休業。休暇の如く、一時やむること。

今迄なし來れることをやむる意。

【やもめ】 寡 孀 嫠

配偶のなき女。但し男女通用す。【例】寡居。寡婦。

夫にわかれて、獨すむ女。【例】泣孤舟之嫠婦。蘇東坡。

【や】 稍 良 寢 較

度合の小なること。「チトばかり」の意。

時間の上にて、「カナリ」、又は頗といふに當る。

やうやくと訓む。其度の漸次増進することにて、「ジリ／＼次第二」といふに同じ。

比也と註す。くらべて視れば、げに少し差ふの意。故に少しと譯す。

ゆの部

【ゆ】 行 往 之 逝 適 饒 豐 【ゆたか】

行 往 之 逝 適

止の反對。歩み進むこと。【例】進行。行商。行人。行旅。晝夜兼行。

來の反對。「ゆきすぎるること」此方より彼方へ進みゆくこと。【例】往來。往復。往還。往昔。往時。

目的地を指してゆく意。【例】岐山の下に之く。夷狄に之く。

一旦ゆきて、再び歸り來らざる意。【例】長逝。永逝。逝去。逝水。

目的地に、一筋にゆく意。之の意に近し。【例】適歸。天子諸侯に適くを巡狩といふ。適くとして可ならざるはなし。

豐 饒 裕 胖 寬 優

多大、盈足の意。財貨の多きにも、道德の大なるにも、肉づきふとりたるにも

いふ。【例】豐富。豐頰。豐大。

多くして満ち足る意。【例】豐饒。富饒。饒舌。

裕 胖 寛 優 【ゆる】 禪 讓 遜 【ゆはり】 尿

衣服のゆつたりとしたる意より、轉じて物のゆるやかにして迫らぬことに用ゐる。【例】富裕。餘裕。

身體の肥滿せること。大きくして安らかに落ち付けること。【例】心廣く體胖なり。

窄の反對。心のくつろぎて、ゆるやかに、ひろきをいふ。【例】寛大。寛容。寛宥。

寛恕。劣の反對。力の優りて餘りある意より、何事も苦惱とせざるにいふ。

【ゆる】

禪讓遜。天子の位を他にゆづり渡さるゝこと。【例】受禪。禪位。

自身を後にして、他人を先きにする事。又、己捨て、他に渡す事。【例】讓與。辭讓。謙讓。

己退きて、他人に與ふること。【例】位を遜る。

【ゆはり】

尿。溺。旋。洩。小便のこと。

小便なり、便旋の義に基きて、小便の義となれるなり。前洩は大便秘をいひ、後洩は小便をいふ。故に、大小二便に通用す。

【ゆ】 溺 旋 洩 夕 晡

尿に同じ。小便なり、便旋の義に基きて、小便の義となれるなり。前洩は大便秘をいひ、後洩は小便をいふ。故に、大小二便に通用す。

【ゆるし】

朝の反對にて、暮に向ふ時をいふ。申の時にて、日の入りかたになりたる頃をいふ。上晡、中晡、下晡を、三晡と稱し、之を總じて晡時といふ。上晡は申の上刻、中晡は申の中刻、下晡は申の下刻なり。申の時とは、今日の午後四時五時なり。

【ゆるし】

緩弛寛徐。繩絲などの、引縮らぬこと、緊しからぬこと。それより何事にも、しまりのなきことに用ゐる。急の反對。【例】緩急。遅緩。緩歩。

【ゆるし】

弓の弦をゆるぶる意より、氣をゆるぶることにも、政治の衰ふることなどにもいふ。【例】紀綱弛廢。力解け勢弛ぶ。懈弛。

【ゆるし】

「くつろげること」「ゆつくりとせること」。それより度量の廣大なるに轉用す。

徐

【ゆるす】

寛容。寛仁大度。寛大。

疾の反對。言語動作のしとやかなること。

許 赦 免 宥 釋 恕 縱 容 允 放

相手の希望を、それにてよしとゆるすこと。 許諾。許可。許容。允許。聽許。特許。免許。

罪過をゆるすこと。 特赦。大赦。赦免。恩赦。

まぬかるとも訓む。罪過をゆるして、まぬかれしむること。 放免。免除。赦免。免許。免狀。御免。免役。

なだむとも訓む。見のがすこと。寛大にして小罪をゆるし置くこと。 宥恕。宥免。

とくとも訓む。罪過ある者を、解き放しゆるすこと。 釋放。無辜を開釋す。情狀を酌量し、人情の上より大目に見て強ひて罰せずゆるすこと。 宥恕。寛恕。

縱 恕 釋 宥 免 赦 許

ほしいまゝとも訓む。手放して、其者の氣儘にすること。

容 允 放 故

いるとも訓む。人の謝罪をいれて、勘辨すること。 まことにと訓む。相手のいふことを、まことによしと認めて、うけがひゆるすこと。 允許。允可。 追ひはなしやりて、その後は干渉せぬこと。 放免。開放。 故肆。所以。

肆

所以

「ソノタメ」又は「ソレニヨリテ」の義なり。上句、上段を受けて、下句、下段を起す辭とす。又句末に用ゐることあり。上句の意終りて、下句を讀み起す時、句頭に此字ある時は、「カルガユエニ」と讀む。これは、「カ、ルガユエニ」の約まれる辭なり。 是故。茲故。亦唯汝故。 上文を承けて、其事の然るが故に、今此の如しといふ辭なり。されば、故今也と註せり。此文字は、故の條に説明せるが如く、「カルガユエニ」と讀むをよろしとす。 肆。中宗之享國七十有五年、書經。 この二字を「ユエニ」と讀むは、「ユエ」の音便なり。

よの部

【よ】

世代

【よ】

能善

克

【よし】

善

世代セダイ

始より終までの、時世に就きていふ。例 周の世、漢の世。

入りかはりになること。古之王者、易代改號取法五行と家語にあるが如きをいふ。又、世と同様に用ゐることあり、漢の代、唐の代などいふが如し。

能善ノウゼン 克コク

己が思ふ如く、自由に爲すことを得る意。例 不可能、無能、多能、能文、能書。

能は十人並によくすることなれど、善は十人以上に優れて、見よく、立派にする意。

かつとも訓む。困難にうちかちて、成就する意。故に賞美の氣味あり。例 克己、克く用ゐる。克く護る。克く當る。

善良ゼンリョウ 好嘉コウカ 佳吉カキキチ 淑シュク

悪の反對、道理、品行などのよきこと。例 善行、善言、善政、善意、善良、善心。

良

好

嘉

佳

吉

淑

呼

喚

【よむ】

すぐれて、よきこと。又、徳性の賢りたるにも用ゐる。例 良夜、良月、良工、良器、改良、賢良、良知、良能、良馬、善良、温良、賢良。

醜の反對、形貌の美麗なるをいふ。それより他にも廣く用ゐる。例 好例、好風景、好風俗、好時節、好天氣、好意、好人物。

善、美、樂の意を有す。例 嘉木、嘉禾、嘉辰、嘉令、美、好の意。例 佳人、佳氣、佳境、佳勝、佳辰、佳良。

凶の反對、めでたきこと。例 吉凶、吉慶、吉報、吉日、善和なる意、婦人の善良、柔和の徳あるをいふ。例 淑徳、淑女、貞淑。

遠きにある者を、聲をあげてよび寄すること。又、單に聲を立て、わめくこと。

呼號、呼聲、歡呼、喧呼、寐ねたる者を呼び覺すが如く、急に大聲を發して呼ぶこと。例 喚起、喚聲、叫喚、招喚。

讀誦、誦、諷、咏、咏



讀誦諷詠自由道

目に見て、口になふること。【例】音讀、精讀、多讀。  
 そらよみをする事。【例】誦讀、背誦。  
 節をつけてうたふこと。但し歌の如く、樂器に合せてうたふものには非ず。【例】  
 諷誦、吟誦。  
 詠の字と通用す。よむと、うたふとの間に、唱といふに近し。詩を作る事  
 にも轉用す。【例】吟咏。  
 自由道從  
 「カラ」ソレカラなどいふ意。所從來也と註す。【例】晨門曰、奚自、子路曰、自孔  
 子、論語。禍自此始矣、蕭何の傳。自是威震西域、後漢書。  
 畧自に似たり、されど自は「手本ヨリ」、由は「手筋ヨリ」の意に用ゐらる。【例】  
 樂由中出、禮自外作、樂書。迷國罔上、近由君始、黃帝因之以紀事、虞舜由之  
 而作歌、韓文。由之觀之。  
 道は通行人の、必ずたより行くものなれば、「ヨリ」の意に轉用す。【例】風道北  
 來、山海經。樗里疾已道穴聞之矣、韓非子。

從 夜宵 因 依 據

就也、順也と註す。自の根源を示すに對して、經歷せる中間の順路を示す意あり。  
 例へば從古以然とある時は、古より今までの間をいへるなり。又自と同  
 様に用ゐることも多し。【例】危國者、從此人始也、五行志。從今以往、從古以來、  
 夜宵  
 晝の反對、日の入りより、日の出づるまでの間。【例】終夜、徹夜、夙夜、通夜。  
 日の暮れて、暗くなりたる時にて、夜の未だ更けの間をいふ辭なれど、終宵、  
 徹宵など、夜と同一に用ゐたる例多し。  
 因 依據 賴 倚 寄 憑 凭 緣 仍  
 源因を見て、手掛りとする事。それにつきての意。【例】因果、因緣、志孝道  
 に存ず、故に孔子之に因りて以て孝經を作る。  
 依賴と連用して、よりますること。力とたのむこと。【例】草木の生ずるは、土に  
 依る。  
 固守の意にて、物を執へて離れず、よりどころとすること。【例】本據、根據、據  
 無し、城に據る。嶮に據りて固守す。

頼 倚 寄 憑 縁 仍 甲 鎧 介

たのみとしてそれによること。又は貴下の御蔭でなどいふ意。例 豪傑の士あれば、國頼つて以て興る。四海凱安なるは、一に君の徳に頼る。

物によりかゝること。例 門に倚りて望む。

たよりにして、そなたにつくこと。例 寄留 寄寓 寄託。

もたれかゝること。例 几に憑る。檻に憑る。軾に憑つて観る。椅子に憑る。憑に同じ。

つきまはる、よりそふの意。例 木に縁りて魚を求む。此の災異の縁つて起る所なり。

「カサナル」とも「シキリニ」とも訓む。一事件を爲し、又更に一事件をすること。帝齊を平げ、仍つて關洛を定むる意あり。

甲 鎧 介 函

鱗甲ノ甲ナリノ義より轉じて、身をかたむるよろひのこととす。例 甲冑。

よろひなり。但し首鎧といふ時は、「カブト」の義となる。

鱗介甲アル蟲類ノ義より轉じて、身をかたむるよろひのこととす。例 介冑。

函

【よろひ】

元來「ハコ」と訓む字なり。はこの中に物を入るゝが如く、身を包み固むるが故に、よろひの義に轉用す。

喜 悅 歡 欣 怡 懌 愉

怒、悲、憂の反對。うれしく楽しく思ふ意。例 喜怒、色に顯はさず。喜悅、喜色

満面、喜憂、悲喜。

心の底より、楽しくうれしく思ふこと。「説」と書くも同字なり。例 中心悦服

す。悦樂、喜悅。

よろこび樂みて、笑ひ語る意。「懌」「懌」皆同じ意なり。例 歡迎、歡喜、歡樂。

よろこびの情面にあらはれて、氣のうき立てる意。「忻」「忻」共に同字なり。例

欣々然、欣然、欣慕、欣舞。

和樂の貌にて、「ニコニコ」として、悦びの顔色に顯はれたるをいふ。

長くよろこぶ意。例 悦懌。先王の命を受けしを懌ぶ。

よろこびて顔色の和ぐこと。例 愉色。

らの部

【らるる】

被見所爲\*

受動の辭にて、人にかぶせらるゝこと。受身の辭ともいふ。寢衣也と註し、衣を被る義より轉じたるなり。例不被用。以萬乘之國被圍、魯仲連の傳、信而見疑、忠而被謗、屈原の傳。

見らるゝの義にて、被よりは意輕し。例某見過、見教、見以爲迂遠而闕於事情、孟軻の傳、四夷交侵以弱見奪、爲の字と、語を插みて用ゐる字なり。されど又單獨にも用ゐらる。例所親厚、黃歇見焚、懷王之爲秦所誘、春申君の傳。

被也と註す。多くは所の字と語を插みて用ゐる。例爲人所推許、爲人推許、身爲禽於中原。

わの部

【わかし】

若

若少弱壯夭嫩

「モシ、シク、ユトシ、ナンヂ、シタガフ」等の訓はあれども、少弱の意なければ此を「ワカシ」と訓むは誤りなり。老若、若者など書くは違へりといふべし。若音、シヤクなれば弱の音の同じきより、ふと誤り來れるにや。

唯年のすくなきこと。例少年、少壯、年少。

男子の二十歳に達せる稱。例弱輩、弱年、弱冠、幼弱、弱齡。

男子の三十歳に達せる稱。例壯年、壯夫、勇壯。

未だ壯年に達せざるをいふ。例夭折、夭死。

樹木などのわかきこと。「嫗」の俗字なり。例嫩葉、嫩芽。

【わか】

分

別

分の反對、別々に物をわくること。例分布、分配、分業、分解、分袂、分散、分合、分割、天下を三分す。

辨別又は差別などの意にて、混雜せぬやう、此は此、彼は彼と區別する意。例特別、格別、別狀、別段、別懇、別邸、別莊、別物、別冊。

判 頌 班 訣 【わく】 涌 沸 溝 【わくはひ】 禍 災 殃 眚 【わする】 遺 忘

半分ハンブンに切りはなつこと。例 判断ハンダン 判決ハンケツ 剖判バウハン 審判シンパン 判定ハンダイ 裁判サイパン 分ちて與ふること。例 頒布ハンブ 佛典ブツテン を塞外サイグワイに頒つ。

頌ハンと音義オンギ相同じ。

生別イキワカれ又は死別シニワカれの意。例 永訣エイケツ 訣別ケツベツ。

涌ヨウ 沸ヒ 溝コウ

水ミヅの池チ中チュウより噴出フンシュツすること。例 涌出ヨウシュツ。

湯ユの煮ニえかへること。湯ユのたぎること。例 沸騰フットウ 煮沸シヨフツ。

わさかへり、わさあがること。例 洶キョウ 涌ヨウ 澎湃ハクハク。文選。

禍ワ 災サイ 殃アウ 眚セイ

福フクの反對ハンタイ。不仕合フシアハセなること。不幸フカウにあふこと。

思オモひもよらぬ不時フジの不仕合フシアハセをいふ。例 災難サイナン 天災テンサイ 火災カサイ 水災スイサイ 神カミの咎トガめをいふ。例 除殃ヨアウ。

身ミのうへに災難サイナンの生シヤウすること。例 災眚サイセイ 並び至イタる。

遺忘イワウ

思オモはず心ココロに取落トリオトすこと。例 遺失イシツ 遺忘イバウ 遺尿イネウ 記憶キキョクを失ウシふこと。例 忘失バウシツ 忘却バウキョク 忘年會バウネンカイ。

渡ワタ 濟セイ 涉セツ 互ゴ 彌ミ

水ミヅをわたること。船フネにても徒歩トホにても、海ウミ 川カハ 廣狹クワウケツに係カらういふ。

己オレわたるにも、人ヒトをわたしてやるにも用モチゐる。例 衆生シュウジヤウ 濟度セイド 濟生セイセイ 救濟キウサイ。

淺アサき水ミヅを徒歩トホにてわたる意。それより書籍シヨセキをざつと博ヒロく見るにも、人ヒトの世話セワを少スコしばかりするにもいふ。例 徒涉トセツ 博涉ハクシヤウ 涉獵セツリヤウ 干渉カンシヤウ 跋涉ハツシヤウ。

此方コナタより彼方カナタまで到達トウダツすること。例 赤虹セキコウ 天テンに互ミタる。連互レンゴウ。

不足フツクなく遍アマく行コきわたる意。例 曠日クワウジツ 彌久ミキウ。

僅キン 纒ケン 才サイ 財サイ 裁サイ

何物ナニモノにても、數量スウリヤウの少スクナきこと。「チツトバカリ」の意。例 僅少キンセウ 僅々キンク。

絲イトを染ソメむるに、幾度イクタビも色水イロミヅに入る、その最初サイシヨイチド一度イチド入れたるばかりのことに、チヨット「ヤット」などの意。例 高祖カウソ 死シして纒ワツカに三年サンネン。春ハルに入イつて纒ワツカに七日。

日。

遺 忘 【わたる】 渡 濟 涉 互 彌 【わづか】 僅 纒

【わらふ】 才

は「財」「裁」と共に、音義皆同じく、纔の意に通用せらる。

笑 哂 嗤 咲 哈 莞

をかしき事ある時、口を開きて笑事。例 冷笑。失笑。大笑。微笑。咲笑。花笑ふ。

齒をあらはすほどに、にっこことわらふこと。微笑の意なり。例 夫子哂之、論語。

嘲りわらふこと。例 愚者愛惜費、但爲後世嗤、文選。

花唇の開くこと。苔のひらくこと。咲は「笑」の古字なり。

嘲りわらふこと。

少しくわらふこと、ほゝるむこと。例 夫子莞爾 笑曰、論語。

【われ】 我

我ガ 吾ヨ 余ヨ 予ヨ 彼に對していふ語にて、自身のこと。例 我國。我慾。彼我。人我の相。物我。唯我。

吾

我は相待の言なれども、吾は絶待の言にて、相對する者なく、我邦といへば、外國に對していふ意なれども、吾國といふ時は、自身の國を重く稱せるにて、對比する國なく、外國を眼中に置かぬ意あり。例 吾國は神國なり。我善く吾浩

予 余

然の氣を養ふ。彼は其富を以てし、我は吾仁を以てす。彼は其爵を以てし、我は吾義を以てす。

吾の意に近し、唯自稱代名詞に用ゐられて、我吾の如く形容詞的修飾語（我國、吾國等）には用ゐられず。

音義共に余に同じ。

# 附録

漢	漢	正	和	故	候	國	字
字	字	字	字	事	文	語	音
類	熟	俗	字	成	の	假	假
似	語	字	大	語	用	字	字
辨	用	誤	誤	語	法	遣	遣
例	例	字	字	篇	及	歌	歌
		辨	要	要	文		
		例	例	例	例		

及國  
作漢  
文文  
類  
字  
鑑  
終

# 附録

漢	漢	漢	正	和	故	候	國	字
字	字	字	字	字	事	文	語	音
類	熟	俗	字	成	の	用	假	假
似	語	字	誤	語	字	語	字	字
用	用	誤	字	大	法	法	遣	遣
辨	辨	字	辨	要	及	及	歌	歌
例	例	字	例	篇	文	文	例	例

及國  
作漢  
文文  
**類**  
**字**  
**鑑**  
終

わの部

1160

# 漢字類似辨

左に字形の類似せるために、誤用し易き文字を擧げ、括弧内には訓方及び熟語を記す。但し、稀には場「バシヨ」の如き音も交れり。

哀アハレム (カナシム、アハレム。悲哀) 衰オドロフ (オドロフ。衰弱) 衷ウチ (ウチ。折衷)  
 暗ヤミ (ヤミ、クラシ。暗夜) 諳ソランズ (ソランズ。諳記、諳誦)  
 溢アフル (アフル。漲溢) 縊クビル (クビル。縊死) 證オクリナ (オクリナ。證號) 鎰メカタ (メカタ。黄金百鎰)  
 隘セマシ (セマシ。狹隘)  
 揖アイサツ (アイサツ。長揖、相揖) 楫カヂ (カヂ。舟楫)  
 酉トリ (トリ) 酋ヲサ (ヲサ。酋長)  
 因ヨル (ヨル。原因) 困クルシム (クルシム。コマル。困卻)  
 厭イトフ (イトフ。アク。厭忌、厭惡) 壓オス (オス。壓制、抑壓)



幼 鳴 億 勘 嶽 幹 稿 庚 千 喙 衛 綱

幼(ヨサナシ。幼稚) 幻(マボロシ。夢幻、幻燈)  
 鳴(ナゲク。嗚呼) 鳴(ナク、ナル。月落鳥鳴、鳴動)  
 億(カズ。億兆) 憶(オモフ、シルス。記憶) 臆(ムネ。胸臆、臆病)  
 勘(サダム。勘定) 堪(タフ。堪忍、堪能)  
 嶽(タケ。富嶽、登嶽) 獄(ヒトヤ。地獄、監獄)  
 幹(ミギ、モト。根幹、幹事) 幹(マロブ、カケマハル。幹旋)  
 稿(カル、。形容枯稿) 稿(シタガキ。草稿)  
 庚(カノエ。庚申) 康(ヤスシ。健康、安康)  
 千(アツカル、ソコバク。干涉、干與、若干、干戈) 于(オイテ、ニ。十有五而志于學)  
 喙(クチバシ。容喙) 啄(ツイバム。啄木鳥)  
 衛(政事ヲスル役所。官衛) 衛(マモル。衛生)  
 綱(ツナ。綱紀、綱領) 網(アミ。天網、蛛網)

緘 記 詰 畜 疆 義 技 嚮 仰 己 宜 快

緘(トヅ。封緘、緘默) 鍼(ハリ。鍼療)  
 記(シルス、シル。記念、書記、記憶) 紀(シルス、ノリ。紀元、紀綱、紀行)  
 詰(ナジル、ツメル。詰問、詰所) 詰(ツデル。詰文)  
 畜(カフ、ヤシナフ。畜類、畜生) 蓄(タクハフ。貯蓄)  
 疆(ツヨシ、シフル。勉強) 疆(サカヒ、カギリ。疆界)  
 義(ヨシ。仁義) 義(イキ。伏羲氏)  
 技(ワザ。技藝、技術) 枝(エダ。枝葉)  
 嚮(サキ、ムカフ。對嚮) 響(ヒビキ。音響) 響(モテナス。響應)  
 仰(アフダ。俯仰、仰天) 抑(オサフ、ソモソモ。抑壓、抑損) 迎(ムカフ。迎謁)  
 己(オノレ。自己) 己(スデニ、ヤム。已然言、不得已) 巳(ミ。辰巳、巳の時)  
 宜(ヨロシ。便宜) 宣(ノブル。宣言、宣旨)  
 快(コ、ロヨシ。快樂) 快(コ、ロヨカラズ。快々不樂)

冠 勸 科 群 獲 官 頃 檢 遣 建 警

冠(カンムリ。衣冠、冠位、弱冠、冠冕) 寇(アダ。外寇)  
 勸(ス、ム。勸誘) 歡(ヨロコブ。歡喜、歡迎) 觀(ミル。觀察)  
 科(シナ。學科) 料(ハカル。料理)  
 群(ムラガル。群集) 郡(コホリ。郡縣)  
 獲(ウル。捕獲) 穫(カル。トリイレル。ヨサム。收穫、秋穫、耕穫) 護(マモル。守護、保護)  
 官(ツカサ。官職、任官) 宦(ミヤヅカヘ。仕宦、宦官)  
 頃(コロ。田百畝ノ稱。頃日。千頃) 頂(イタダキ。頂上) 項(ウナジ。クビ。事項)  
 檢(シルス。カンガフ。檢定) 驗(シルシ。コ、ロミル。試驗)  
 遣(ヤル。ツカハス。派遣、遣唐使) 遺(ノコス。オクル。ワスル。遺言、遺失)  
 建(タツ。建築、建國) 健(スコヤカ。健康、健全) 鍵(カギ。合鍵)  
 警(シハブキ。警咳) 馨(ニホフ)

擊 挾 減 刑 卿 穀 侯 壑 忽 察 采

擊(ウツ。攻撃) 繫(ツナグ。繫縛、繫留)  
 挾(ハサム。挾擊) 狹(セマシ。狹小)  
 減(ムル。減少) 滅(ホロブ。滅亡)  
 刑(ツミス。刑罰) 形(カタチ。形影)  
 卿(キミ。ナンジ。公卿) 郷(サト。郷里)  
 穀(米ノタグヒ。五穀) 穀(カラ。貝殼) 轂(車ノコシキ。輦轂)  
 侯(キミ。侯伯、諸侯) 候(ウカガフ。サフラフ。氣候、伺候)  
 壑(タガヤス。開壑) 懇(ネンゴロ。懇切、懇親)  
 忽(タチマチ。ユルカセ。カロンズ。忽然、輕忽) 忽(イツガハシ。忽々)  
 察(カンガフ。視察) 際(キハ。分際、際限)  
 采(イロドル。カタチ。トル。五采。風采、采薪ノ疾) 彩(トル。ツヤ。彩色、光彩)  
 採(トル。採集) 菜(ナ。野菜)

職 茸 且 鍾 衝 刺 坐 塞 裁 削 操

操(トル、アマツル、ミサヲ。操練、節操) 繰(クル。手繰ル、繰合ス)  
 削(ケヅル。添削、削滅) 刪(ケヅル。刪修)  
 裁(ウウル。栽培) 裁(タツ、サク、ワカツ。裁縫、裁判) 截(タツ、キル。截斷、直截)  
 載(ノス、トシ。乘載、千載) 戴(イタダク。頂戴)  
 塞(ヘダ、ル、サカヒ、フサグ。閉塞) 塞(トリヂ)  
 坐(スワル、キナガラ。端坐、坐食、坐睡) 座(キドコロ。座敷、高座)  
 刺(サス、コロス。刺殺、刺客) 刺(モトル。潑刺)  
 衝(ツク。衝突) 衝(ハカリ。權衝) 衝(クツワ。馬衝)  
 鍾(アツマル、ヤシナフ。鍾愛) 鐘(ツキガネ。警鐘、梵鐘)  
 且(カツ、シバラク。苟且) 旦(アシタ。詰旦、明旦)  
 茸(クサムラ、タタ、シゲル。蒨茸、蒙茸) 茸(屋ヲフク)  
 職(ノボリ、ハタ。旗幟) 熾(サカン。熾盛) 識(シル、シルス。知識) 織(オル。織)

帥 侵 商 侍 壤 熟 持 屣 祇 涉 暑

暑(アツシ。暑氣) 署(フミ、ツカサ。警察署、部署、署名)  
 涉(ワタル。跋涉、徒涉) 陟(ノボル。登陟、黜陟)  
 祇(ツ、シム祇候) 祇(クニツカミ。神祇)  
 屣(クツ。弊屣) 屣(アシダ。高屣)  
 持(モツ。捧持) 特(コトニ、ヒトリ。特別)  
 熟(ウム、ツラツラ。熟練) 塾(イヘ、マナビドコロ。家塾)  
 壤(コエツチ。壤土) 壤(ヤブル。破壞)  
 侍(ハベル、サムラヒ。侍講、侍史) 待(マツ、アシラフ。待遇、接待)  
 商(アキナフ。商賣、商標) 商(モト「本」、ヤハラグ)  
 侵(ユカス。侵入) 浸(ヒタス。漬浸、涵浸)  
 帥(ヒキキル。將帥、元帥) 帥(イクサ、モロモロ、ヨシフル人。師團、師旅、師匠)

物)

遂 掣 籍 折 宵 梢 瀉 銷 隻 姓 祖 淘

遂(ツヒニ、トグ。遂行) 逐(オフ。驅逐)  
 掣(ヒク。掣肘) 製(ツクル。製造)  
 籍(カキモノ。書籍) 藉(ムシロ、シク、ススム。狼藉、慰藉)  
 折(ヨル。折半、折衷) 析(ワカツ。分析) 析(ヒヤウシギ。擊析)  
 宵(ヨヒ。今宵) 霄(ソラ。霄壤、雲霄)  
 梢(コズエ。樹梢) 稍(ヤマ)  
 瀉(カタ。新潟、八郎瀉) 瀉(カタブクル。吐瀉、一瀉千里)  
 銷(キユル、ケス。銷磨、銷夏) 鎖(トザス、クサリ。封鎖、鐵鎖)  
 隻(カタカタ、ヒトツ。隻眼、敵艦一隻) 雙(フタツ。一雙)  
 姓(ウヂ。姓名、百姓) 性(ウマレツキ。性質) 牲(イケンニヘ。犧牲)  
 祖(オヤ。皇祖、先祖) 租(ミツギ。租稅、地租) 粗(アラシ。粗末、粗笨)  
 淘(スグル、淘汰) 陶(スエモノ。陶器)

隋 態 膽 棹 茶 澤 彈 段 飭 陣 帙

隋(ヨコタル。怠惰) 隨(シタガフ。隨行、隨意) 墮(オツル。墮落)  
 態(ナリフリ。態度) 熊(クマ)  
 膽(キモ。大膽、膽略) 瞻(ミル。瞻望、仰瞻) 瞻(タル。富瞻)  
 棹(サヲ。桂棹) 掉(フルフ。尾大不掉)  
 茶(チヤ。茶屋、茗茶) 茶(ニガナ。茶毒)  
 澤(サハ。沼澤) 擇(エラム。選擇) 鐸(大ナル鈴。木鐸) 繹(ノブル。人馬絡繹)  
 驛(ツジウマ。驛馬)  
 彈(ハマル。彈力、彈丸) 憚(ハバカル。忌憚) 驪(スグレタル馬。飛驒國)  
 段(キリ。階段、此段) 段(カリ。假に同じ) 暇(イトマ。間暇)  
 飭(ツツシム。戒飭) 飾(カザル。裝飾)  
 陣(ツラナル。陣營) 陳(ノブ、フルシ。陳述、陳腐)  
 帙(フミツツミ。書帙) 秩(ツイデ、フチ。秩序、秩祿) 跌(ツマヅク。蹉跌)

釣 低 廷 萩 詔 第 挺 哲 兔 徒

送(カハル。交迭)  
 釣(ツル。釣魚。釣(三十斤ノ重サ。一髮千鈞ヲ引ク)鈞(カギ)均(ヒトシ。平均均等)  
 低(ヒクシ。高低)抵(イタル。オホムネ。大抵)抵(モト。ネ。根抵)  
 廷(タヒラカ。朝廷)延(ノブ。ヒク。延引。遷延)  
 萩(ヨギ)萩(ハギ)  
 詔(ヘツラフ。詔諛)詔(ウタガフ)  
 第(イヘ。ツイツ。第宅。第二弟)弟(オトウト。兄弟。弟子)  
 挺(ヌキンズ。挺身。挺進)挺(ツエ)  
 哲(モノシリ。先哲。哲學)哲(アキラカ。シロシ。明哲。白哲人種)  
 兔(ウサギ。兎角)兔(マヌカル。免許)兎(書クハ俗字)  
 徒(トモガラ。イタヅラ。タダ。生徒。徒歩)徒(ウツル。移徙)從(シタガフ。從順)

怒 場 霸 貝 倍 買 癢 斑 枚 派

從容  
 怒(イカル。憤怒)恕(ユルス。オモヒヤリ。容恕。寬恕)  
 場(バシヨ。馬場。演劇場)場(サカヒ。疆場)  
 霸(カシラ。一番。王霸。霸權)羈(タビ。羈旅)羈(ホダシ。羈絆。羈束)  
 貝(カヒ。梵貝)貝(ソナフ。ツブサニ。具申)  
 倍(マス。數倍。倍蓰)培(ツチカフ。培養)陪(クハフ。マス。カサヌ。ツキシタガフ。ハベル。陪席。追陪。陪從)  
 買(カフ。賣買)買(アキナヒ。アタヒ。商賈)  
 癢(スタレヤマヒ。癢疾。癢兵院)廢(スタル。廢止。廢城。廢物)  
 斑(マダラ。斑白)班(ワカツ。ツイヅル。天地剖班。班別。班次)  
 枚(エダ。カズ。枚舉)牧(マキ。牧馬)  
 派(エダナガレ。流派。派出)脈(スチ。血脈)

背 妨 判 敏 貧 微 未 錨 傳 俯

背(セ、ソムク。違背)脊(セナカ。脊髓)  
 妨(サマタゲ。妨害)防(フセグ。防禦)  
 判(ワカツ。裁判、判定)叛(ソムク。叛逆)  
 敏(トシ。敏捷)誨(ヨシフ。訓誨)  
 貧(マツシ。貧窮)貪(ムサボル。貪婪、貪慾)  
 微(カスカ。スクナシ。衰微)徵(シルシ。メス。徵候、徵兵)徽(ハタシルシ。徽章)  
 未(ヒツジ。イマダ。未明)末(スエ。末葉、末子)  
 錨(イカリ。拔錨)描(ウツス。描寫)鈿(カンザシ。螺鈿)  
 傳(カシツク。教へ人。師傅)傳(ツタフと訓む。傳達、傳聞)  
 俯(フス。俯伏、俯瞰)附(ツク。附帶、附庸、小國)腑(臟腑)

復 弊 辨 聘 瓢 陞 壁 敵 戊 俸

復(マタ。フタタビ。カヘル。往復)複(カサナル。重複、複雜)  
 弊(ヤブル。弊害、弊政)幣(ヌサ。ニギテ。ゼニ。幣帛、奉幣使、貨幣)蔽(オホフ。  
 隱蔽)  
 辨(ワカツ。ワキマフ。辨別)辯(アキラカ。言巧ミ。辯舌、辯護)瓣(花ビラ)  
 辨(カム。マトウ。辨髮)  
 聘(ヨブ。招聘)騁(ハセル。馳騁)  
 瓢(フクベ。ヒサゴ。瓢箪)飄(ヒルガヘル。飄然)  
 陞(キザハシ。陛下)陞(ノボル。陞敍)  
 壁(カベ。トリデ。壘壁)壁(タマ。夜光ノ壁)  
 敵(ヤブル。敵衣)廠(ウマヤ。砲兵工廠)  
 戊(ツチノエ。戊申詔書)戍(マモル。衛戍病院)戍(イヌ。丙戌の歲)  
 俸(タマモノ。俸給)捧(ササグ。捧呈)棒(棍棒)

募 模 簿 摩 漫 密 明 綿 冶 容 勞

募(ツノル、モトム。募集) 暮(クレ、クル。薄暮、日暮)  
 模(カタチ、イガタ、ノツトル。規模、模型) 摸(ナラフ。摸案、摸範)  
 簿(帳簿、簿記) 薄(ウスシ。薄弱)  
 摩(ミガク、スル。按摩、摩擦) 磨(ミガク、トグ、スリウス。琢磨)  
 漫(ミダリ。漫然、爛漫) 慢(アナドル。傲慢、緩慢)  
 密(ヒソカ、チカツク。秘密、親密) 蜜(ハチミツ。蜜蜂)  
 明(アク、アキラカ。天明、明月) 朋(トモ。朋友)  
 綿(ワタ、ツラナル。連綿) 錦(ニシキ。錦衣)  
 冶(キタフ。冶金、陶冶) 治(ヨサム。政治、治療)  
 容(カタチ、ユルス、イル。容貌、許容、内容) 客(マラウド。賓客、旅客)  
 勞(ツカル、ツトム。功勞、慰勞) 瑩(ハカドコロ。先瑩) 榮(サカユ。繁榮) 熒(ヒ  
 カリ、カガヤク。熒惑) 榮(コミツ。榮陽) 熒(ヒトリ、ウレフ。熒獨)

裏 梁 慮 綠 李 羸 獵 斂

裏(ウラ。裏面) 裏(ツツム。包裹)  
 梁(ハシ、ウツバリ、ヤチ。橋梁) 梁(アハ、梁粟)  
 慮(オモンパカル。考慮) 虜(トリコ。捕虜) 虞(オモンパカル)  
 綠(ミドリ。綠樹) 緣(シタガフ、ヨル、フチ。因緣、緣故、緣起) 椽(タルキ)  
 李(スモモ。桃李不言) 季(スエ。澆季、季子、四季)  
 羸(ツカル。羸弱) 羸(カツ、アマリ。輸羸)  
 獵(カリ。漁獵、獸獵) 蠟(ラフソク。蠟燭) 臘(年末ノ祭事ニテ、十二月ノ異名ト  
 ス。臘月)  
 斂(ヨサム、アツム。聚斂) 歛(コフ、ムサボル。歛愆)

### 漢字類似辨終

### 漢字熟語用例

左記の『是』の部は、慣用あり、典據ある文字にして、『非』の部は意義の類似せるより混用せるものなれば、使用せざるを可とす。

改善	臆測	位置	意志	一斑	因襲	諳誦	(是)
良	憶	地	思	班	習	暗	(非)

伎倆	干涉	簡單	覺悟	夏季	效果	學科	(是)
伎倆通用す	關	短	期	期	葉	課	(非)

器械	徽章	機關	機運	汽車	希望	規律	(是)
機	記	器	氣	涼	冀	紀	(非)



研究	缺席	協同	緩慢	課業	觀念	款待	關係	規模	記憶	氣概	(是)
窮	欠	共	漫	科	感念	歡	干	摸	臆	概	(非)
深切	首唱	唱道	相違	相當	言語道斷	講和	根柢	原因	結局	檢查	(是)
親	主	稱	異	等	同	交媾	底	源	極	檢	(非)
常磐	摺紳	莊嚴	自動	真誠	思想	趣意	旨趣	刺擊	狀態	信仰	(是)
盤	縉	壯	働	正	志	主	主	趣	激	情	(非)

十分	情況	需要	時候	社會	囑託	諸侯	障礙	揣摩	推薦	成功	掣肘
充	狀況	用	候	界	托	候	害	磨	選	撰	制
銷夏	撰述	選舉	成績	專制	招待	端坐	單獨	臺灣	對抗	鍛鍊	淘汰
消	選	撰	蹟	擅	請	座	特	台	向	煉	陶
知識	駐筭	丁寧	鄭重	廢疾	廢學	發揮	賠償	反映	俳諧	妨害	必要
智	割	叮	丁	廢	廢	輝	陪	影	誹	防	用

正字俗字誤字辨  
和字大要

漢字熟語用例

終

奉讀 補助 併用 編輯 敷衍 複雜 畢竟 (是)

捧 | 輔 | 並 | | 布 | 復 | 必 | (非)

禮義 聯合 理會 濫用 明瞭 摸範 (是)

| 儀 連 | 解 | 亂 | 亮 | 模 | (非)

漢字熟語用例

ヒ、フ、ヘ、ホ、メ、リ、レ、

# 正字俗字誤字辨

鶯と鶯

兩字相通用す。

奥と奥

奥アウおく。おくふかし。奥アウと書くは誤字。奥、襖等も類推すべし。

庵と庵

庵アンおん。小き草舎。いほり。庵アンと書くは誤字。

頤と頤

頤イおごがひ。頤イと書くは俗字。

醫と醫

兩字相通用す。

淫と淫

淫インみだる。うるほす。淫イン、淫インは共に誤字。

鬱と鬱

鬱インは音ウツ、訓シゲル。鬱インと書くは俗字。

穎と穎

穎エイさきほ。穎エイと書くは俗字。

衛と衛

衛エイまもる。くにざかひ。衛エイは俗字。衛、衛エイは共に誤字。

鹽と鹽

鹽エンは音エン。訓シホ。鹽エンは鹽エンに同じ。鹽エンは俗字。

正字俗字誤字辨 ア、イ、ウ、エ

園と園 園エンの 園は誤字。遠、園も類推すべし。袁とは異なり。  
 幼と幼 幼エウいごけなし。幼と書くは誤字。  
 温と温 兩字共様に用ゐる。音ヲン、訓イデユ、オダヤカ、アタタマル、ダヅヌなど。  
 角と角 角カクつの。かど。角は誤字。  
 學と學 學ガクまなぶ。學誤字。覺、費、等も類推すべし。譽とは異なり。  
 尻と尻 尻カウしり。尻は誤字。  
 看と看 看は看的俗字。  
 函と函 函カンいる。はこ。函は俗字。  
 陷と陷 陷カンおちいる。陷は誤字。  
 刈と刈 刈ガイかる。けづる。刈は誤字。  
 解と解、と解 解ガイこく。解、解共に誤字。  
 届と届 届は音カイ、ケイ、訓イタル、キハム、トドク。届と書くは俗字。

衡と衡 衡カウはかり。よこ。衡は誤字。  
 礙と碍 礙ガイさへぎる。ささふること。碍は俗字。  
 含と含 含カンふくむ。含は誤字。  
 巖と岩 岩ハ品ハの俗字。俗に巖の省字とす。  
 翰と翰 翰カン文書。たかし。翰は誤字。  
 閒と間 閒は音カン、訓アヒダ。間と書くは、閒の俗字。  
 羹と羹 羹カウあつもの。羹は俗字。  
 囂と囂 囂カウかまびすし。囂は誤字。  
 憂と憂 憂カウほこ。する(轍)。憂は俗字。  
 況と況 況音キヤウ。訓タトフ、マシテ、アリサマ、タマフなど。況は況の俗字。  
 虚と虚 虚キョむなし。うら。虚は誤字。

筇と筇

筇は音キヨウ、訓ツエ(竹杖)。筇は筇の俗字。

伎と技

伎は伎倆と連用し。技は末技、長技、技藝などと連用す。伎と技とは通じても用ゐる。

奇と奇

奇は奇の俗字。寄、倚、倚、崎、騎等も類推すべし。

戲と戲

戲は音ギ、訓タハムル。戲は戲の俗字。

毀と毀と毀

毀は音キ、訓タハムル。毀は共に誤字。

競と競と竟

三字共に相通用す。

危と危

危は音キ、訓タハムル。危は誤字。厄、脆、詭等も類推すべし。

器と器

器は器の俗字。

今と今

今は音イマ。今は誤字。

卻と却

卻は音キヤク、訓シリゾク、カヘリテなど。却と書くは俗字。

徽と徽

徽は音キ、訓タハムル。徽は誤字。

碁と碁と碁

三字共に相通用す。

究と究

究は音キ、訓タハムル。究は誤字。

恭と恭

恭は音キョウ、訓タハムル。恭は誤字。

恐と恐

恐は音キョウ、訓タハムル。恐は誤字。

驅と駈

兩字相通用す。

具と具

具は音キ、訓タハムル。具は誤字。俱、棋等も類推すべし。

回と回

兩字共に同じ。音クワイ、訓メグル。回と書くは俗字。

寬と寬と寬

寬は音カン、訓タハムル。寬は共に誤字。

怪と恠

恠は怪の俗字。

黃と黃

黃は音ワウ、訓タハムル。黃は誤字。

畫と畫

畫は音クワ、訓タハムル。畫は俗字。

鶴と鶴

兩字相通用す。

館と館

館は音クワン、訓タチ、タテ、ヤカタなど。館と書くは俗字。

勳と勲、勳 クン いさをし、勲、勲は共に俗字。

撃と擊、撃 ダキ うつ、撃は誤字。

決と決、決音タツ、訓キレル、サダマル、キマル。決と書くは俗字。

綱と網、綱 タイ ひこへもの。網は誤字。

逕と徑、逕音ケイ、訓コミチ。兩字音訓相同じ。

慶と慶、慶 ケイ よろこび。いはふ。慶は誤字。

攜と携と攜、攜音ケイ、訓タツサフ。携、攜と書くは俗字。

卿と卿、卿 ケイ 朝廷の上官。天子の臣下を呼ぶに用ゐる稱。卿は誤字。

鶏と雞、兩字相通用す。

欠と缺、欠 ケン あくび(欠伸)。缺 ケツ かぐ(缺席)。

減と減、減は音カン、デン、訓ヘル。減と書くは俗字。

兼と兼、兼 ケン かぬ。ふたつながら。兼は誤字、嫌、嫌、謙、謙等も類推すべし。

教と教、教は音ケウ又はカウ、訓ヲシフ。教ハ俗字。

隙と隙、隙 ケキ ひま。隙、隙は共に誤字。

穴と穴、穴 ケツ あな。うがつ。穴は誤字。

叫と叫、叫音ケフ、訓サケブ。叫は叫の俗字。

協と協、協 ケウ かなふ。やはらぐ。協、協共に誤字。

卷と卷、卷 ケン まく。かがまる。卷は誤字。倦、捲、蜷等も類推すべし。

獻と獻、獻は音ケン、訓タテマツル。獻と書くは俗字。

原と原、原 ケン はら。もこ。原は誤字。源、愿等も類推すべし。

彦と彦、彦 ケン 男子の美稱。ひこ。彦、彦共に誤字。諺、顔、産等も類推すべし。

劔と劔、兩字相通用す。

袴と袴、袴 コ はかま。袴は誤字。

鼓と鼓

鼓は音コ、又は、ク、訓ツヅミ。鼓と書くは俗字。

厚と厚

厚は音コ、あつし。あつさ。厚は誤字。

吳と吳

吳は音ゴ、大なり。かまびすし。吳は俗字、娛誤等も類推すべし。

黒と黒

黒と書くは俗字。

構と構

構は音コウ、訓カマフ、クミタツ。構音コウ、牽く意にも、構搦と

連用して、事を解せず、くらき意にも用ゐらる。

功と功

功は音コウ、いさを、事業。功は誤字。

箇と個

箇は音カ、物事を數ふるに用ゐる字。個は元个に同じく、个の意

味は箇に同じ。

寇と寇、寇

寇は音コウ、あだ。うごなふ。寇は俗字。寇は誤字。

恆と恒

恆は音コウ、訓ツネ。恒と書くは俗字。

瑣と瑣

瑣は音サシ、くづ。瑣は誤字。

坐と坐

坐は音ザ、すわる。うがろに。坐は誤字。

桑と来

来は桑の俗字。

讒と讒

讒は音サン、うしふる。うつたふ。讒は誤字。

讚と讚

讚は音サン、訓ホム、タスク。讚と書くは俗字。

贊と贊

贊は贊の省字。

冊と冊

冊は音サク、詔勅、文書、典籍等をいふ。今普通に冊と書すれども、冊

と書くを正しとす。

齋と齋

齋は音サイ、もたらす。おくる。齋は誤字。

頤と腮

頤は音サイ、あごこ。腮は俗字。

雙と双

雙は正字にて。双と書くは俗字。

喪と喪

喪は音サウ、うしなふ。ほろぶ。喪、喪共に誤字。

傘と傘

傘は音サン、からかさ。あまがさ。傘は誤字。

爽スウと爽スウ 爽スウ あきらか。さわやか。たがふ。爽スウ は誤字。

窗サウと窓サウと窓サウ 窗サウ 音サウ、訓マド。窓サウ は窗の俗字。窓サウ は窓の俗字。

漆シツと漆シツ 漆シツ うるし。漆シツ は誤字。

象シヤウと象シヤウ 象シヤウ は音シヤウ、又はザウ。象シヤウ と書くは俗字。

貳ニと貳ニ 貳ニ ニと同じ。ふたつ。貳ニ、貳ニ 共に誤字。

盡シユウと盡シユウ 盡シユウ は盡の誤り。儘、儘等も類推すべし。

收シウと收シウ 收シウ は收の俗字。

者シヤと者シヤ 者シヤ もの。は。者シヤ と書くは誤字。煮、都、著、緒、諸、消、箸等類推すべし。

承シヤウと承シヤウ 承シヤウ うく。うけたまはる。承シヤウ は誤字。

牀シヤウと牀シヤウ 牀シヤウ は牀の俗字。

舍シヤと舍シヤ 舍シヤ やごり。いへ。舍シヤ は誤字。

將シヤウと將シヤウ 將シヤウ まさに。軍のかしら。將シヤウ は誤字。

昇シヤウと昇シヤウ 昇シヤウ のぼる。昇シヤウ は誤字。

鍼シヤウと針シヤウ 針シヤウ は鍼の俗字。

真シヤウと真シヤウ 真シヤウ は眞の俗字。

卽シヤウと卽シヤウ 卽シヤウ つく。すなはち。卽シヤウ、卽シヤウ 共に俗字。啣、節、極等も類推すべし。

絲シヤウと糸シヤウ 絲シヤウ は音シ、訓イト。糸シヤウ は音ベキ、訓ホソイト。世に糸を以て絲の

省字として同様に用ゐれども、全く音訓を異にせる別字なれば注意すべし。

辭シヤウと辭シヤウ 辭シヤウ は辭と通用す。辭シヤウ は辭の俗字。

準シユンと準シユン 準シユン のり法。たひらか。準シユン は俗字。準シユン は誤字。

術シユツと術シユツ 術シユツ わざ。てだて。術シユツ は誤字。

處シヨと處シヨ 處シヨ をる。ところ。處シヨ は俗字。



寫と寫

寫シヤうつす。寫は誤字。

出と出

出シユツいつでる。外へ致す。出は誤字。咄、屈、拙等も類推すべし。

嘗と嘗

嘗は音シヤウ、訓ナム、ココロミル、カツテなど。嘗シヤウと書くも嘗シヤウに

同じ。

稱と稱

稱シヨウはかる。こなふ。稱は俗字。

柿と柿

兩字共にカキと訓めども俗字なり。柿シと書くを正しとす。柿シの

音シなり。

從と從

從は音シヨウ、又はジユ、訓シタガフ。從シヨウと書くは俗字。

晉と晉

晉シンススム。又國名。晉は俗字。晉シンは誤字。

旨と旨

旨は旨の俗字。

兒と兒

兒ニこわかもの。兒ニは俗字。

敘と叙

敘は音ジヨ、訓ツイテ、イトグチ、ノブなど。敘シ一に敘シと書くも同字

屬と屬

なり。叙シと書くは俗字。

屬は音シヨク、又はソク、訓ツク、ヤカラ、シタヅカサ。屬シヨクと書く

は俗字。

尋と尋

尋ジンたづぬ。尺度の名。八尺。尋ジンは誤字。

姉と姉

相通用す。

乗と乗

乗は音ジヨウ、訓ノル。乗ジヨウと書くは俗字。

切と切

切キきる。しきり。切キは誤字。

竊と竊

竊セツぬすむ。ひろかに。竊セツ、窃は共に俗字。

歳と歳

歳サイとし。歳サイは誤字。

潛と潛

潛は音セン、訓クグル、ヒソム。潛センと書くは俗字。

叟と叟

叟ソウとしより。おきな。叟ソウは誤字。

族と族

族ソクいへがら。うち。族ソクは誤字。

總と総 兩字相通用す。

馱と駄 馱タおはす。のす。馱は誤字。

内と内 内ナイうち。いる。内は誤字。内、納、訥、等も類推すべし。

帶と帶 帶タイおび。おぶ。めぐる。帶は誤字。

體と軀と体 軀は體の俗字。体は音ホン、笨に同じ。アラシ(麤)と訓む。されば体を體の略字と心得て通用するは誤りなり。

臺と臺と台 臺は音タイ、又ハダイ、訓ウテナ。臺と書くは俗字。台ハ音タイなれども、其意義は、「星の名、三公の稱、ハラゴモリ」などにて、臺の意義とは全く異なり。之を同一に用ゐるは誤りなり。

當タウ あたる。當は誤字。

嶋と島と島 三字通用す。

盜と盜 盜ダイぬすむ。ぬすびこ。盜は誤字。

歎と嘆 歎は音タン、訓ナゲク、タメイキツク、ホムなど。嘆と書くも同じ。

達と達 達タツこぼる。すぐれたる人。達は誤字。

丈と丈 丈ヤウ 尺度の名。尺の十倍。丈は誤字。仗、杖等も類推すべし。

徵と徵 徵チョウめす。しるし。五音の一。徵は誤字。

勅と勅 勅は音チヨク、訓ミコトノリ。勅は勅と相通用す。

恥と耻 恥は音チ、訓ハヂ。耻と書くは俗字。

鎮と鎮 鎮は鎮の俗字。

筑と筑 筑チク一種の樂器。筑は誤字。

著と着 著は、アラハル、アキラカ、イチジルシなど訓む時は、音チヨツク、又はキル、キモノなど、訓む時は、音チヤク。着は著の俗字。

蟲と虫 蟲は音チウ、訓ムシにて、足ある動物の總稱。虫は音キにて虺と書くに同じ。マムシ又は鱗介の總稱とす。世人之を同一に用ゐ

るは誤りなり。

腸と腸

腸チキウはらわた。

腸は俗字。

場と場

場は場の俗字。

鐵と鍊と鉄

鐵は音テツ、訓クロガネ、ハモノなど。

鍊ハ音テイ、鐵の名なり。

又鐵の古文なり鉄は古文の鉄の字なり。鉄は音チツ、訓メフ、イ  
ルなど。故に鉄を鐵の俗字とするは誤りなり。

輒と輒

輒チツすなはち。

輒は俗字。

塵と塵

塵チンすまひ。みせ。

塵は誤字。纏、塵等も類推すべし。

典と典

典テンつかさどる。のり。

典は誤字。腆、腆等も類推すべし。

寧と寧

寧テイやすし。むしろ。

寧は誤字。

呈と呈

呈は音テイ、訓シメス、アラハス。

呈ハ古文の呈又ハ狂の字にて、  
呈とはその意異なり。

兔と兔

兔はうさぎ。兔は俗字。

鬪と鬪

鬪は音トウ、ツ、訓アラソフ、タタカフ。

鬪と書くは俗字。

寶と寶と宝

寶は音ハウ、訓タマ、タカラなど。

寶と書くは俗字。宝も俗字。

拔と拔

拔ハツぬく。拔は誤字。

冒と冒

冒バウをかす。むさぼる。

冒は俗字。帽、瑁等も類推すべし。

博と博

博ハクひろし。はくち。

博は誤字。

旆と旆

旆ハイはた。旆は誤字。

麥と麦

麦と書くは俗字。

罰と罰

罰ハツつみ。こがむ。

罰は誤字。

阪と坂

阪は音ハン、訓サカ。

阪は地勢傾きて險しき處をいひ、坂

犯と犯

犯ハンをかす。たがふ。

犯は誤字。

凡と凡 凡は音ハン、訓オヨソ。凡と書くは誤字。帆、汎等も類推すべし。  
 報と報 報ハウむくゆ。知らず。報は誤字。服も反なれども、報は反なり。  
 氷と氷 氷は音ヒヨウ、訓コホリ。氷は氷の俗字。  
 賓と賓 賓ヒシ客のこと。みちびく。賓は俗字。  
 分と分 分フンわかつ。なかは。分は誤字。扮、忿、粉、紛、貧等も類推すべし。  
 奮と奮 奮フンふるふ。うごく。奮は誤字。  
 並と並 兩字共に音ヘイ、訓ナラブにて意義相同じ。  
 滅と滅 滅ベツほろぶ。しづむ。滅は誤字。  
 遍と徧 徧は音ヘン、訓アマネシ。徧は遍と音義共に同じ。  
 覓と覓 覓ミ音ベキ、訓モトム。覓は覓の俗字。  
 溟と溟 溟メイくらし。海の稱。溟は誤字。  
 邊と邊 邊ヘンほごり。かたはら。邊は誤字。

没と没 没ボツしづむ。ほろぶ。没は誤字。  
 鳳と鳳 鳳ホウ神鳥の雄。鳳は誤字。  
 豐と豐 豐ホウ音ホウにて、ユタカと訓む。豊を豊と同様に用ゐるは誤りなり。  
 逢と逢 逢ホウあふ。むかふ。逢は誤字。  
 歩と歩 歩ホあゆむ。土地丈量の尺度の名。歩は誤字。  
 慕と慕 慕ボしたふ。慕は誤字。  
 滿と滿、滿 滿マンみつ。みたす。滿、滿は共に誤字。  
 麻と麻 麻マあさ。麻は誤字。  
 脈と脉 脈バクすぢ。脉は俗字。  
 蒙と蒙 蒙ボウくらし。かうむる。蒙は誤字。濛、朦等も類推すべし。  
 模と模 模モ音モ、訓カタ、ノリ。模は模の俗字。

頼と頼 頼は頼の俗字。瀬を瀬と書くも此に同じ。

亂と乱 乱は亂の俗字。

隆と隆 隆リウは隆リウの俗字。隆リウは誤字。

旅と旅 旅リョは旅リョの俗字。旅リョは誤字。

稟と稟 稟リンは稟リンの俗字。

裏と裡 裡リは裏リの俗字。

兩と兩、両 兩リウ、両リウ共に誤字。兩、両共に誤字。兩、両共に誤字。兩、両共に誤字。兩、両共に誤字。

し。

涼と涼 涼は音リヤウ、又はラウ、訓ウスシ、スズシ、悲シムなど。涼と書

くは俗字。

梁と梁 梁リヤウは梁リヤウの俗字。梁リヤウは誤字。

類と類 類ルイは類ルイの俗字。類ルイは誤字。

禮と礼 禮は音レイ、ライ、訓キヤ。礼は正しくは礼と書くべし、礼は禮

の古文。

獵と獵、獵 獵レツは獵レツの俗字。獵レツは誤字。

曆と曆、歴と 歴レキは曆レキの俗字。歴レキは誤字。

往と往 往ワウは往ワウの俗字。往ワウは誤字。

往ワウは往ワウの俗字。往ワウは誤字。

# 正字俗字誤字辨 終

## 和字大要

我國にて、便宜上漢字の缺を補はんがために作れるものを和字といふ。故に和字には、訓のみありて、音なし。されども中には、症(シヤウ)、鋸(ビヤウ)、釘(ネギ)の一種(字)ヤウ、命令)など漢字音を借りて、字音の如く讀ませたるも交れり。今左に、古來用ゐられる者の中より、尤も著しきものを擧ぐ。

- アツパレ。賞讚シヤウサンすること。
- イワシ。一種イツシユの海魚。
- オモカゲ。面容メンヨウをいふ。
- オロシ。山上サンジャウより吹きおろす風カゼ。
- ヲドシ。鎧ヨロヒの小札コヂネを、綴りたる絲イト、草カハルキの類をいふ。實ジツは緒通チヨトホしの意。
- カウチ。酒サケなど作る原料ゲンレロとするもの。
- カマス。米麥コメムギなどを入る、藁袋ワラフクロ。

鮪 凧 込 笹 柳 眩 鳴 躰 鯨 梶 亡 杓 杓

キス。一種の海魚。  
 コガラシ。秋の末より冬にかけて吹く風。  
 コム。  
 ササ。小竹の稱。  
 サカキ。一種の木。  
 シカト。確かなるにいふ。  
 シギ。一種の鳥。  
 シツケ。禮儀作法などを教へ習はしむること。  
 シヤチ。一種の海獸。  
 スギ。杉と同様に用ゐる。  
 スベル。足のするくくと、とらぬにいふ。  
 ソマ。山林、材木、伐木業者等をいふ。

峠 凧 襷 辻 間 狎 襷 凧 峠

タウゲ。山坂の登りつめたる處。  
 タコ。紙鳶とも書く。小兒の玩具。  
 タスキ。袖をくくりあぐる紐。  
 チン。小き一種の狗。  
 ツカヘ。支障のあること。サシツカヘといふ。  
 ツジ。四方に通せる道路。十字街のこと。  
 ドヂヤウ。一種の魚。泥鰌とも書く。  
 トテ。到底といふに同じく、如何にすとも意あり。  
 トモ。古の弓射る時に用ゐし具。  
 ナギ。風のやむこと。海上の静穩なるにもいふ。  
 ナマヅ。一種の淡水魚。  
 ニホ。一種の水禽。形鴨に似たり。

畑

ハタケ。豆麥マメムギなど植うる陸田をいふ。畑ハタケに同じ。

島

ハタラク。骨折ホネヲること。

働

ハナシ。話ワタシに同じ。

鋤

ハバキ。刀劔ツバモトの鏝元カテを固むる金具。

枅

マス。穀類コメなど量る器ハカ。

粃

モミ。米コメの皮カをとらざるもの、又は米コメの皮殻カハガラをいふ。

磨

マロ。麻アサと呂ロとの合字。自己ジコの謙稱ケンショウ。

廳

ヤガテ。古くは、すぐに(直に)の意イに用ゐたれど、今日コンニチは少時セウジを経て後ノチの意イに用ゐる。

鎗

ヤリ。武器ブキの稱ショウ。

和字大要終

故事成語篇



# 故事成語篇

## あの部

【雲霧】

雲の盛なることにも、たなびくことにもいふ。「一一として雲布る」。

【欸乃】

船歌のことなり。「一一一聲山水綠なり」。

【煥休】

休は、一に咻字に作る。氣息を以て温むること。それより、人の困窮せるを恵むにも用ゐる。「窮民を一一す」。

【鞅掌】

多くは事務の多忙なるに用ゐる。鞅は物を荷ひ、掌は物を捧ぐる意にて、荷うたり、手に持ちたりして、儀容をつくろふ暇なきこと。「王事に一一す」。

【鏖戰】

敵を皆殺にするほど、全力を盡して戦ふこと。

【惡漢】

惡者のこと。漢とは男の意なり。漢子といふ時は、賤丈夫のことなり。

【齷齪】

急はしく、物にこせつくこと。文選に、「小人は自ら一一たり、安ぞ曠士の懷を」。

知らむ」とあり。小人は器量の淺小なるもの。曠士は胸中の廣大なるもの、こと。

【寇に兵を藉し、盜に糧を齎す】 敵に刀槍等の兵器を借し、盜賊に糧食を與ふるは、其害益、甚しき由なり。こは味方に害ありて、敵に利益あることを喩へて云へるなり。

【中らずと雖、遠からず】 誠心より求むる時は、目的に向ひて、正しくは中らざるまでも、大なる相違はなきことをいふ。

【斡旋】 立ちはたらき周旋すること。元槓杆のかひ物を動かして、其方向を變ふる義より出でたるなり。

【羹に懲りて、蠶を吹く】 熱き羹を吸ひて、舌を焼きしに懲り、蠶を食ふにも猶その熱からむことを疑ひて、口にて之を吹くをいふ。懲戒に過ぎたる譬へにて、一度物に懲り、臆病となれるこ、ちなり。蠶は、正しくは、アヘモノと讀むべし。

【亞父】 父に亞ぎて尊ぶ人のこと。楚の項羽、范增を「亞父」と稱したりき。

【晏駕】 天子の崩御をいふ。晏は晩なり 天子崩せらるるとも、臣子の心はなほ、宮車の少しにても、おそく駕して出づべしと望み思ふ意にとる。

【雨車軸の如し】 雨滴の大なることを喩へて、車軸といへるなり。大雨の形容にいふ。

【危きこと累卵の如し】 卵を積み累ぬるは、極めて粹け易き恐れあり。故に危きことに喩ふ。

いの部

【委蛇】 蛇のうねりゆく貌。又な、めにゆく貌。逶迤と書くも同義なり。

【優渥】 恩澤のゆたかに治きこと。優はユタカ、渥はアマネシと訓む。「天恩」。

【優游】 間暇あること。又自得の貌にも、決しかぬる貌にもいふ。「黄金世界に遊す」。

「一自得す」。「大事を舉げむとして、而も一すること數年」。「一不斷」。

【友于】 兄弟の仲むつまじきをいふ。書經の「惟孝友于兄弟」とあるより出づ。

【誘掖】 たすけ、みちびくこと。前に在りて導くを誘といひ、傍に在りて扶くるを掖といふ。「其君を――す」。

【悠久】 はるかに、久しきこと。長久といふに同じ。

【游侠】 死を軽んじ、義を重んずる人をいふ。所謂ヲトコダテのことなり。任侠、豪俠などいふも同じ。

【游子】 出游して外に在る者のこと。遊學の書生、若しくは旅客のことなどにいふ。

【雄圖】 すぐれたる、はかりごと。

【怒を遷さず】 甲のために怒りて、その餘勢乙に及ぶをいふ。俗にいふヤツアタリのことなり。

【意氣揚々】 こゝろもちの、あがり高ぶりて、自慢顔なるにいふ。

【頤使】 人をあごにて、使ふこと。「天下を力制し、――すること意の如し」。

【維新】 國政の革り新なるをいふ。詩の大雅に「周雖舊邦、其命維新」とあるに本づく。

【彙進】 彙は類なり。多くの小人どもが、類を以て朝廷に進み仕ふるをいふ。

【一衣帶水】 帶の如く、せまき水の意。

【一葉落ちて、天下の秋を知る】 一葉とは梧桐の一葉のことなり。凡、天下の事物、その始の小なるを見て、その終の大なるを察すべきに喩ふ。

【一言以て之を蔽ふ】 一言にして、その意味を言ひつくすこと。

【一家言】 自ら唱へはじめたる、一派の論をいふ。

【一擧手一投足】 少しの骨折をいふ。「――の勢を吝む」。

【一將功成りて、萬骨枯る】 一將が功名を成せるは、萬卒が命をすてたる結果なるをいふ。

【一刹那】 極めて短き時をいふ梵語。壯士が一たび指を弾く間に一の刹那ありといへるにて、その極少を知るべし。

【一丁字を識らず】 一文字も知らざること。丁は今の誤なるべしといふ。「眼に一丁

字なし。

【一擲乾坤を賭す】 天下を取るか、捨つるかの博奕をするといふことにて、つまり、思ひきつた、大仕掛のやりかたをすること。

【鵓蚌の争】 鵓はカハセミ、蚌はハマグリなり。鵓と蚌と相争ひて、兩つながら漁者に獲らるゝことにて、兩者の利を争ふまに、他より、よこどりせらるゝことの喩へとす。

【二髮千鈞を引く】 危急なることの形状に喩ふ。

【溢美の言】 ほめすぎのことは。

【乙夜の覽】 天子の讀書せらるゝこと。乙夜は、今の午後十時なり。五更を、甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜に分つ。乙夜は即ち二更なり。「唐の太宗曰く、若し、甲夜事を觀、乙夜書を觀ざれば、何を以て人君と爲さむと。」

【韋編三たび絶つ】 書を読むことの、たび重なるをいふ。韋は竹簡を綴ぢたる韋なり。古は文字を竹簡に彫りつけたる故に、韋は、今日の綴糸に當る。孔子易を讀みて

韋編三たび絶つ」と抱朴子に見えたり。

【暗啞叱咤】 暗啞は、怒氣を懷くこと。叱咤は、怒聲を發すること。史記の項羽本記に「―――すれば、千人皆廢る。」

【埋鬱】 氣の愁ひ結ばるゝこと。埋は一に湮に作る。

【氤氳】 氣の盛なる貌。杜甫の句に「佳氣日に―――」。

【殷鑑は遠からず】 鑑み戒むべき滅亡の例は、遠く古に求めずとも、近く目前に在りといふ意。「―――不遠、在夏后之世」と詩經に見ゆ。

【引決】 覺悟を定むること。又、自殺すること。

【因襲】 これまでの、しきたりによること。襲も因の意なり。

【印綬】 綬は組紐なり。官吏の帶ぶる印の環を承けつなぐもの。長さ一尺二寸、廣さ三尺。「―――を佩ぶ」。

【允文允武】 允はマコトなり。文武の徳の、まことに盛なるをいふ。詩經にある語。

【湮滅】埋れ消えて、なくなること。「その名一にして稱せられず」。

うの部

【鳥有】鳥んぞ此の事有らむといふことにて、無の字の意に用ゐる。「一に歸す」といふ時は、總べて無くなりしこと。

【有爲轉變】宇宙間の萬物は、すべて無常變轉を免れず。暫くも常住することなしとの意。佛教の語なり。

【干役】ゆきて役はる、こと。「江戸に干役す」。

【雲煙過眼】一時の慰みにして、長く執著せざること。東坡の語に「之を雲煙の眼を過ぎ、百鳥の耳に感ずるに譬ふ。豈欣然之に接せざらむや、去つて復念はざるなり」

【雲泥】天地といふに似たり。懸隔の甚しきをいふ。

えの部

【塋域】墓地をいふ。

【營營】住來奔走する貌にて、俗にいふアクセクすること。

【永訣】永く別る、ことにて、死別をいふ。

【嬰城】城を守ること。嬰守といふも同じ。

【要斬】要は腰なり。こしの處をきりたつ刑罰。

【夭折】わかじにすること。早世といふに同じ。

【少塵】微小なること。

【要領】要は腰なり、衣の腰をいふ。領は衣領なり。凡、衣を持つ者は、必、腰と領とを執る。それよりして、事の主要の義とす。

【要路】當路顯要の官をいふ。「一に登る」。

【役々】力を勞すること。「終身一として、その成功を見ず」と莊子に見ゆ。

【奕世】奕は累なり。累世といふに同じ。

【奄有】<sup>エンイウ</sup> 覆<sup>オホ</sup>ひたもつといふことにて、皆取るをいふ。「四海をーす」と書經に見ゆ。

【奄奄】<sup>エンエン</sup> 奄は、精氣の閉ぢをさまること。息<sup>イキ</sup>のたえぐなるを、「氣息ー」といふ。

【遠交近攻】<sup>エンカウキンコウ</sup> 遠邦<sup>シケン</sup>に親み、近國<sup>キンゴク</sup>を伐つ政略をいふ。織田信長が近畿の敵(淺井、朝倉、齋藤、佐々木、叡山、三好、松永等)を攻めて、武田、上杉などに交り、歡心<sup>クワンシン</sup>を得むと力めたりしが如き政略。

【煙霞の痼疾】<sup>エンカコソウジツ</sup> 深く山水を愛すること。煙霞は山水をいひ、痼疾は久しくこりかたまりて、治すべからざる疾をいふ。

【偃蹇】<sup>エンケン</sup> 驕傲<sup>ケウガウ</sup>の貌。

【淵叢】<sup>エンサウ</sup> 物の多く聚まる所をいふ。淵は魚のあつまる所、叢は獸のあつまる所なり。「學者のー」。

【鉛槧】<sup>エンゼン</sup> 文筆に従ふを、ーに從事すといふ。槧はしらげ削りたる板にて、鉛を以て之に書することなり。筆紙といふが如し。

【遠水は近火を救はず】<sup>エンスイケンカヲクサズ</sup> 遠き親類よりも、近き隣といふ諺と同じ意なり。親しきものも、手近<sup>テチカ</sup>にあらねば、急の用に立たざるに喩へたるなり。

【淹留】<sup>エンリウ</sup> 久しく滯留<sup>タイリウ</sup>すること。淹は久しく留まる意。

### おの部

【謳歌】<sup>オウカ</sup> 徳をほめうたひて、これに心を歸する意なり。

【溫清】<sup>ワンセイ</sup> 父母に事<sup>ツカ</sup>ふる禮。溫は、冬はあたためて、寒からぬやうにし、清は、夏は涼しくして、暑からぬやうにすること。

【思半に過ぐ】<sup>オモヒナカバ</sup> 思考して、自ら得る所多きをいふ。

【汗吏】<sup>アヅリ</sup> 心きたなく、邪惡の役人をいふ。

【汗隆】<sup>アヅリ</sup> 盛衰<sup>セイスイ</sup>の意。汗はくぼみたること、隆は起きあがりたること。

### かの部

【介意】 氣にかけること。介は挟みもつ意。

【崖岸】 きはだちて、他に異なりたる行あるをいふ。又、高ぶり傲る意にも用ゐる。元來は、水のがけの高き所をいふ。

【諧謔】 俗にいふオドケルことなり。諧は、わかり易く俗人にかなひ、聞きて面白く感ずる意。謔は戯れ言なり。

【戒嚴】 強敵の攻め來らむとする時に、備を設くること。

【海賈】 船商人のことにて、船商といふに同じ。

【邂逅】 不意に、であふこと。

【骸骨を乞ふ】 老臣の辭職を乞ふこと。既に年老いて、用をなし難き故に骸骨に喩ふるなり。

【睚眦の怨】 少しのうらみのこと。一寸目を見はりて、さからひ視る位の怨なり。

【改竄】 詩文などの字句を改め易ふること。竄も改め易ふる意。

【海若】 海の神をいふ。

【海澨】 海の水際にて、海濱と同じ。

【蓋世の氣】 世の中を蓋ふほどの、氣象大いなること。

【剗切】 能くあてはまること。適切に懇ろなること。剗も亦切の意に同じ。

【疥癬の患】 外患の微小なること。深く憂ふるに足らざること。一はヒゼンのことなり。

【解體】 人々の離れぐじになりて叛くこと。

【咳唾も自ら珠をなす】 詩文の才に富める人を稱する語。容易に名句を作ること。

咳はセキとも、シハブキとも訓む。唾はツバキなり。咳唾も自ら珠をなすは、勢力の盛んなるに喩ふるなり。

【該博】 すべてのことに、兼ねて博く通すること。該は兼ね備はる意。

【耿介】 剛正にして、ヘンクツツに近きこと。

【梗概】 大略の意。梗は略なり。

【耿耿】 心安からざる貌。心存する所ありて、忘るゝ能はざる貌。「一」として寐られず。

【高閣に束ぬ】 棚の上に束ねて用ゐざることを。

【浩瀚】 廣大なる貌。「載籍一」。

【傲岸】 かどくしく、物にをこりて屈せざることを。

【剛毅木訥は仁に近し】 論語の語。木は質樸、訥は遲鈍。剛毅なる時は、物欲に屈せ

ず木訥なる時は、外馳に至らず、故に仁に近し。

【膏肓の病】 不治の難症をいふ。

【巧言令色】 言を巧みにし、顔色をほどよくして、人の氣に入るやうにすること。令は

善の意。

【高材疾足】 材智高く、足のすぐれてはやくこと。智勇兼備の人をさす。

【行尸走肉】 無用の人をいふ。人の學ばざる者は、死尸にして能く行き、死肉にして能

く走るが如しとの意。

【浩然の氣】 水の流れて止まざるが如き、至大至剛なる氣象をいふ。浩然是、盛大流行の貌。

【高足の弟子】 優れたる門人をいふ。

【豪宕】 心のあらく大にして、普通の度量に超ゆること。

【巧運は拙速に如かず】 ぐづくして巧みにできるよりは、拙くとも、速に行ふ方がよろしとの意。こは事柄によるべし。

【狡兔死して赤狗烹らる】 狡兔死すとは、敵國の亡びたるに喩へ、走狗烹らるとは、味方の謀臣の殺さるゝに喩ふ。韓信の言に「狡兔死して走狗烹られ、高鳥盡きて良

弓藏められ、敵國破れて謀臣亡ぶ、天下已に定まる、我固より當に烹らるべし」。

【行潦の水】 路上の源なき水なり。即ちタマリミツのこと。

【行樂】 たのしみ遊ぶこと。劉廷芝の詩に「三春行樂在誰邊」。



【毫釐の差千里の謬を致す】 最初に僅の差を生ずる時は、末に至つては、甚しき大差を來すこと。

【亢龍の悔】 上りつめて、却つて失敗すること。亢龍は、尊貴を極むるものに喩ふ。尊貴を極めて慎まざる時は、敗亡の悔を來す意。

【下學して上達す】 下人事を學び盡して、上天理を發明して上達するをいふ。論語に「子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。」

【下愚】 至つておろかなる者をいふ。論語に「上知與下愚不移。」

【諤諤】 是非を直言すること。

【客氣】 血氣の假勇にして、眞の勇にあらざること。

【恪勤】 恪は「ツ、シム」勤は「ツトムル」意にて、誠實に勤むること。

【角逐】 勝負を競争すること。

【鶴髦】 鶴の羽毛にて作りたる毛衣。

【矍鑠】 老いて輕健なるものをいふ。「一」なるかな是の翁や。

【河清を俟つ】 支那の黄河は水常に濁りて、千年に一たび清むといひ傳ふ。之をまつは、殆望みなきこと、いふ意。「黄河千年一たび清む」「百年河清をまつ」。

【渴仰】 渴者の水を慕ふが如く、その人を仰ぎ慕ふこと。

【合従連衡】 従は縦に同じ、合従とは縦を合すといふこと。衡は横に同じ、連衡とは、横に連ぬといふこと。合従は、蘇秦六國を説いて、同盟して秦に當るをいひ、連衡は、張儀六國を説いて、秦と連合せしむるをいふ。前者は六國のためにし、後者は秦のため

【鼎の輕重を問ふ】 天子の位を奪はむとする意あるをいふ。鼎は古へ支那天子の寶物なり。大小輕重を問ふべき者にあらず。然るに之を問ふは、帝位を奪はむと欲する意あるなり。

【餓莩】 莩は、餓死すること。うるたる者と、うるて死せる者を一といふ。

【雁行をなす】 雁の列をなして飛ぶ如く、順次に少しづつ、後れてゆくこと。又、あとに従ひてゆくこと。

【間居】 間は空なり。何のなす事もなく、静に家に在ること。論語に「小人一爲不善」。

【汗青】 書籍のこと。竹簡を火に炙りて汗の出るやうにし、その青みを取りて書き易くし。且蟲のつかぬやうにするより出でし文字なり。

【間然するなし】 すさまを指して、かれこれと、非難すべき點のなきをいふ。

きの部

【杞憂】 無益の憂をいふ。列子に、杞國に、天の崩れ墜ちて、身の寄るべき所なからむことを憂ひて、寢食を廢する者ありといふに本づく。トリコシ苦勞のこと。

【朽索六馬を馭す】 極めて危険なるに喩ふ。

【九仞の功を一簣に虧ぐ】 多くの苦勞も、僅の過失のために、敗ること。一仞は八尺なり。簣は、土をもりて運ぶモツコのこと。九仞の山を築くに、一簣の土を缺げば、

完成すること能はず。これがために積年の勞も甲斐なきに至る喩へなり。

【九鼎大呂よりも重し】 九鼎は禹の時九州より金を貢しめて、鑄造せし鼎にして、夏殷周二代相傳へて寶となす。大呂は、周廟の大鐘にて、これも國の寶器なり。

【棄市】 罪人を殺して、屍を市中にさらすこと。

【倍屈贅牙】 文字艱澁にして解しがたきをいふ。

【木に縁りて魚を求むるが如し】 魚は水に棲むものなるに、木に縁りて之を求めむとすとも、得べからず。求むるに其道に由らざれば、勞して功なきに喩へたるなり。

【驥尾に附く】 蒼蠅の、千里の馬の尾につきて達する如く、後進の人が、先輩の士に従ひて名を成すこと。

【岌々乎として殆いかな】 岌々乎は、安からざる貌。

【金甌缺ぐるなし】 堅くて、完全なることを稱する語。

### くの部

【薰蕕器を同じうせず】善人と悪人と、一處に居るべからざるに譬ふ。薰は香のよ

き草にて、善人に喩へ、蕕は香の臭き草にて、悪人に喩ふ。

【會心】心によく適ふこと。

【荒唐の言】廣大にて、かぎりなく、漠然としてとりとめなき言をいふ。

【豁達大度】心、事理に通達して、度量の寛大なるをいふ。

【畫餅】事の空しくなれること。畫きし餅は食ふべからず、無用なるがゆゑなり。

【棺を蓋ひて事定まる】人の善惡の評は、死後に及びて定まるをいふ。

【冠蓋相望む】使者の頻りに往來すること。前に行きし使者はかへり、後より出でし

使者往き、車の冠蓋前後相望むこと。

### けの部

【形骸を土木にす】外貌をかざらざること。

【形而上】眼に見えぬ無形の道をいふ。形而下は器物の如き有形の物をいふ。而は助

字なり。

【逕庭】大小廣狹の隔ること遠きをいふ。

【雞肋】さして有用にはあらざれども、亦棄つるは惜しとの意。

【拳拳服膺】能く守ること。拳々は捧げ持つ意。服膺は胸に著けて忘れず守ること。

### この部

【後學】年少き學者のこと。先輩に對して、後輩といふが如し。後進の學者といふ意。

【肯綮】肝要の處をいふ。肯は骨に著ける肉、綮は、筋と肉と結ばる、處。人と論じて、

その急所を衝くを、議論一に中るといふ。

【後昆】後世といふと同じ。昆も後の意。

【恒産なき者は恒心なし】つねに定まれる生業財産のなきものは、また定まれる

善心なしとの意。但、こは學びて義を知らざる民のことなり。恒は、常と異なり。久しきに互りて變らざる意あり。

【口實】 俗にイヒグサといふこと。他の事を借りて、己の非をいひわけする意。

【後世畏るべし】 年わかきものは、將來畏るべしといふこと。後世とは少年のことなり。少年は、年富み精力も強ければ、學を積みて、將來爲すことあるに足る。故にその勢畏るべしといふ意。

【胡越の意】 疏遠といふ意に用ゐる。胡は北に在り、越は南に在りて、地の相距ること甚遠ければなり。

【國士】 國中第一の人をいふ。名聲一國を蓋ふといふ意。

【國是】 國家の是とする公論をいふ。

【國歩】 國の運をいふ。歩は運の意。「一艱難」

【虎穴に入らずんば虎子を得ず】 危険を冒さざれば、功名をなす能はざるに喩

ふ。

【怙恃を失ふ】 父の死を怙を失ふといひ、母の死去を恃を失ふといふ。詩經に「無父何怙無母何恃」とあるに出づ。

【虎視眈眈】 極めて威嚴あるさまの稱。眈々は、虎の下を視る貌。虎の目を張りて下視するは極めて威風あるものなり。

【鼓吹】 人の氣を上げまし、ひきたつること。鼓うち、歌をうたひ、笛を吹くは、人の氣をひきたつるものなるが故にいふ。

【骨鯁の臣】 正直剛毅の臣。一説に直言の義。鯁は魚骨なり、骨の喉中に留り、ふさぐこと。以て直言の受け難きに喩ふ。

柱に膠して瑟を鼓す】 規則になづみて、融通のきかぬに喩ふ。柱は自由に場所を移して、絃の緩急を調ふるものなるに、膠にて動かぬやうにしたらんには、一定の調子以外に出づる能はざるなり。

【顧眄】 眄は、よこめにて視ること。一は、ふりかへりて視ること。

【混沌】 天地の未だ生ぜざる時は、いかなるにも見分けのつかざること。三五曆紀に

「未有天地之時、一如鷄子。」

【股栗】 おそろふ、ことの甚しきをいふ。戰栗といふが如し。

【刻舟劍を求む】 物に拘泥して、變通を知らざるに喩ふ。呂氏春秋に「楚人の劍、舟中より水に墜つ。遽に其の舟に契して曰く、是わが劍の墜ちし所なりと。舟は已に行きて劍は行かず。亦惑ひならずや。」

さの部

【采薪の憂】 病みて、薪を採ること能はずといふ意にて、己が病を稱する謙辭なり。

【濟勝の具】 健脚の稱。山河の勝景を跋渉する具の意。

【載籍】 書籍のこと。載は記載、籍は借なり。この簡書を借りて記録すといふ意。

【濟度】 すくふこと。佛經の語なり。三界の苦海より衆生を濟ひて、彼岸に度すといふ

意

【糟糠の妻】 糟糠の如き物をも食ひて、困窮せし時より、艱難を共にして來りし妻を

いふ。後漢書に「宋弘曰く、貧賤の交は忘るべからず。一は堂より下さず。」

【桑梓】 故郷のこと。古は毎戸桑梓の二木を、樹ゑて、子孫に遺し、蠶食、器用に供したりしによる。

【草莽の臣】 仕官せずして、野に居る者の稱。

【左袒】 同意すること。袒は、衣の袖を脱ぎて、肉をあらはすなり。彼を外にし、此のためにする意。

【蠶食】 他の國をじりじりと奪ひ取ること。蠶が桑の葉を食ふが如く、少しづつ、食ひ取る意より轉ず。

【斬新】 さはだちて新しきこと。

【酸鼻】 二目と見られぬ、無慙なる有様を悲痛していふ。

【殺風景】興をさますこと。風景を殺ぐ意より出で、其場の景を損すること。清泉に

足を濯ひ、花に禪を曬らす類なり。

【嶄然として頭角を見はす】幼にして、衆にすぐれたる者の稱。嶄然は、山の尖り

て鋭き貌。頭角は小兒の結べる頭髮。

【三昧】専心一意なること。物の妙處を得ること。「一」に入る。

【三餘】平素忙しき者の勉強する暇。魏略に、董遇といふ者、從學者の學ぶ日なきに苦

むといふに答へて、當に三餘を以てすべし。冬は歳の餘、夜は日の餘、陰雨は時の餘なりと。

【三舍を避く】謙讓の意。又辟易の意にも用ゐる。古は師行くこと三十里にして

舍る。三舍を避くとは、九十里退くことなり。左傳に「若し君の靈を以て、晉國に

反るを得て、晉楚兵を治めて中原に遇はゞ、其れ君を辟くること三舍せむ」とあるに本づく。

### しの部

【戸位素餐】功なくして、空しく官祿を食むこと。戸位は、其の位に居て、其の事を爲

さざるをいふ。素は空しく、餐は食ふ意にて、空しく祿を食むこと。

【鹿を逐ふ者は山を見ず】利慾に迷ふ者は、道理を忘るゝに喩ふ。淮南子に「獸を

逐ふ者は、目に太山を見ず、嗜欲外に在れば、則明蔽はる」とあり。

【自家撞著】自ら言ふことの、前後あはざるをいふ。著は助詞。

【式微】衰微すること。詩に「式微、式微、胡不歸」とあり。微は衰に同じ。

【死灰復燃ゆ】勢を失ひし者、再熾になるに喩ふ。

【獅子吼】佛家にて、多くの邪惡なる者、外道などを畏れずして説法すること。獅子吼

えて、衆獸の畏服するに喩ふ。

【獅子身中の蟲】内より禍の生ずるに喩ふ。梵網經に、「獅子身中の蟲、自ら獅子の肉

を食ふ。餘の外蟲にあらざるが如し。是の如く、佛子自ら佛法を破る。外道天魔、能く

破壊するにあらず。

【疾風に勁草を知る】 困難に遭ひて、節操のすぐれたるを知るに喩ふ。風の疾き時に、弱き草は仆れ臥すれど、勁き草は常に異ならざるが如しとの意。

【自暴自棄】 自らその身をそこなひ、自らその身をすつるをいふ。暴は害の意なり。自らその身を害する者は、禮義の美たることを知らずして、之を非毀す。自らその身を棄つる者は、仁義の美たることを知れども、怠惰にして行ふこと能はずとの意。

【人口に膾炙す】 人々の口にはめらるゝこと。膾はナマス、炙はアブリ肉。膾炙の口に旨きが如くに、人々の口に稱讚せらるゝをいふ。

【人後に落つ】 人に先んせられて、しりへにあること。李白の句に「風流豈肯落人後」。

【參差】 長短齊からざる貌。  
【唇齒の國】 利害の關係最も深き國をいふ。戰國策に「趙之於齊楚也隱蔽也、猶齒之有唇也、唇亡則齒寒、今日亡趙、則明日及齊楚」。

【蓋臣】 忠臣といふに同じ。蓋は、進なり、忠愛の篤き、進々として已むことなき意なり。

【針砭】 訓戒の意に用ゐる。一は病を治する具。砭はイシバリ。

【四面楚歌】 重圍の中に陥ること。項羽本紀に漢の軍四面楚歌するを聞きて、項王乃ち大に驚いて曰く、漢皆已に楚を得たるか、とあるに出づ。

【霜を履みて、堅氷至る】 禍の初めは少し。されども、漸次にして大患となること。霜のふりたるを踐まば、日ならずして堅氷の時至るを知るべきが如し。易經の語。

【駟も舌に及ばず】 一たび發言したることは、之を取り消さむとして、駟馬(四頭立の馬)の疾き車を以て、追つかけても、取りかへしのつかざること。

【尙友】 尙は上なり。進み上りて、古人を友とする義。

【城下の盟】 降參すること。敵軍に逼られて、都城の下にて、和議の盟約をすること。左傳の桓公十二年に「楚、絞を伐ちて大に之を敗る、城下の盟を爲して還る」とあり。之は諸侯の深く恥づる所なり。

【章程】規則書の類をいふ。程は法式なり。法式を記して章となしたるを一といふ。

【綽々として餘裕あり】綽々は寛なる貌。裕はユタカなる意。事に臨んで迫らざる

こと。

【守株の見】時勢に應せずして、舊習に拘泥するに喩ふ。韓非子に「宋人田を耕す者あり、田中に株あり、兔走りて株に觸れ、頸を折きて死す。因りてその未を釋て、株を守

る。復兔得むことを覘ひ、兔復得べからず、而して身は宋國の笑となる」と見ゆ。

【首鼠兩端】二心のあること。鼠の性、疑多きを以て、穴を出で、觀望し、一前一却、進退決せず。故に兩端を持つ者にたとふ。

【出藍の譽】弟子の、師よりもすぐれたるをいふ。荀子に「青は藍より出で、藍より青し」とあるに出づ。

【食頃】須臾といふに同じ。シバラク。食事する間の事にて、短きことなり。

【食言】いつはりといふこと。言を出して其の言を守らざるは、言を食ふ所以なり。

【食指動く】御馳走になる前兆。左傳宣公四年、公子宋の故事に出づ。

### すの部

【垂拱】衣を長く垂れ、手をこまぬくこと。無爲にして治まるを一の治といふ。

【樞機】極めて、大切のこと。樞は戸のくる、なり。くる、に由りて、戸は開閉するを得

機は弩牙にて、弩は之に由りて張りも弛みもするなり。易に「言行君子之。」

【數奇】不仕合のこと。數は運命、奇は虧の意にて不偶なり。

【過ぎたるは猶及ばざるが如し】孔子の語。道は中庸を以て至極となす。賢智の

過ぎたるは、愚不省の、人並に及ばざるにまされるが如しと雖、其の中道を失ふことは則ち一なるをいふ。

### せの部

【正鵠を失はず】目的にたがふことなきをいふ。正も鵠も皆射的なり。



【星霜】 星は一年に天を一周し霜は毎年降る。故に一年を一星霜となす。

【清楚】 清くさつぱりしたる義。楚は鮮の意。

【掣肘】 人、事をなさむと欲して、人の牽制(ヒキトメル)を受けて、行ふこと能はざること、肘は臂節なり。掣はひくこと。

【井底の蛙】 見る所の少なる喩へ。莊子に「井蛙には以て海を語るべからざるは虚に拘すればなり云々。虚とは、井中の空をいふ。後漢書に、馬援隗囂に謂うて曰く、「子陽は井底の蛙のみ、而して妄りに自ら尊大にす」。

【齊東野人の語】 妄誕(イツハリ)の説をいふ。齊國の東鄙に居る野人の妄説にして、信ずるに足らざるをいふ。齊人は多く妄説を吐きたるもの、如し。孟子に「此非君子之言、齊東野人之語也」。

【蕭牆の憂】 ウチワの騒動をいふ。蕭牆は門屏なり。禍患は、近く門屏の中に在る意にて、内變あること。論語に「吾恐季孫之憂不在顯與而在蕭牆之内也」。

【赤子の心】 純一にして、偽りなき、生れたま、の清淨なる心。孟子に「大人者、不失其赤子之心者也」。

【尺蠖の屈するは、信びむことを求むるなり】 尺蠖は「シヤクトリムシ」。尺蠖の屈めるは、伸びむことを求むるためなり。人の艱難に耐ふるは、他日立身出世の基となるに喩ふ。易經に「尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄、以存身也」。

【銓衡】 銓も亦衡なり、量なり。人物を銓量(ハカル)するをいふ。  
【前車の覆るは後車の戒】 前車の傾覆するを見て、後車は之を警戒して、覆さるやうにすべしとの義。

【千丈の堤も蟻の穴を以て潰ゆ】 大事は細より起り、難事は易より起る。故に事をなすには、細事を慎み、易を戒むべしとの喩へなり。

【先哲】 前の世に出でたる、智徳のすぐれたる人をいふ。  
【穿窬の盜】 小盗人のこと。穿は壁をうがち、窬は牆を踰ゆる意。

### その部

【宋襄の仁】 馬鹿げたあはれみをいふ。春秋戦國の時、宋の襄公茲父といふ者、諸侯に覇たらむと欲し、楚の成王と泓に戦ふ。公子目夷、敵の未だ陣せざるに及びて、之を撃たむと請ふ。公曰く、君子は人を阨に困めずと。遂に楚のために敗らる。世笑ひて、以て宋襄之仁といふ。その事左傳に見ゆ。

【惻隱の心】 惻は傷ことの切なること。隱は痛のふかきなり。「人に忍びざる心」といふに同じ。孟子に「惻隱之心、仁之端也」。

【咀嚼】 能く噛みこなして、玩味すること。

【祖述】 遠くその道を宗とし、之をうけつぎて述ぶるをいふ。中庸に「仲尼祖述堯舜、憲章文武」。

【率先】 真先にする。衆を率ゐ、先だちて専ら行ふをいふ。

【付度】 付は思なり、度なり。一は推測といふが如し。

### たの部

【第一義】 第一番大切といふ意に用ゐる。大藏法數に「第一義とは、無上甚深の妙理なり」。

【太早計】 速合點に過ぐる。莊子に「汝亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鷄炙」。

汝も亦、ハヤノミコミが過ぎる、鷄卵を見て、すぐに時をうたはむことを求め、彈弓を見て、すぐに鶩の炙肉を食はむことを求むの意。

【泰山北斗の如し】 泰山は、山東省の青州の西方に在り。北斗は北辰ともいひて、北極星のこと。泰山北斗の如しとは、泰山北斗を仰ぐが如く、尊崇すること。泰山北斗を略して、泰斗ともいふ。

【大聲は里耳に入らず】 正しき音楽は、俗物の耳には分ぬこと。即ち、高尚なる言は、俗人に解し得られざるに喩ふ。莊子に「大聲不入於里耳」。

【駘蕩】 春の景色ののどかなる貌。又、曠遠の貌。「春物方一一」「風光一一百花春」「春風一一」。

【台鼎】 天の三台星にて、三公に喩ふ。三公は人臣の最高位にして、國家の要職なり。故

に象を三台星と、鼎の三足とに取りて、一と一といふ。

【太牢の滋味】 大御馳走の意に用ゐる。牛羊豕の肉を合せ具ふること。滋味はうまみ

の意。小牢は羊豕のみをいふ。

【韜晦】 わが才徳を包みかくして、あらはさぬこと。くらますといふに同じ。

【瞠若】 直と視て、ものをも言はず、呆れたること。

【刀筆の吏】 小吏をいふ。古の書物は、簡牘を用ゐたりし故に、刀は書を削るために、吏

は皆刀筆を持ちたりしなり。

【桃李言はざれども、下自ら蹊をなす】 桃李は、その華實のあるために、自ら

廣告せざれども、人争ひ來りて、往來絶えず、その下自然に蹊となるといふ意。徳ある

人は、黙して潛み居れども、人自ら歸服するに喩ふ。

【他山の石以て玉を攻くべし】 小人を石に比し、君子を玉に比し、君子が小人に

侵されて、善く省修研磨して、徳器を成就するに喩ふ。玉は天下の至美なり、石は天下の至惡なり。然れども玉は石を以て之を磨き、器を成す。猶君子と小人と處るが如し。と程子いへり。

【多多益善】 多々益辨すともいふ。兵數多ければ多きほど、益、よく之を用ゐるをいふ。史記淮陰侯傳に「上問ひて曰く、我が如きは、能く幾何に將たらるべきぞ、信曰く、陛下は能く十萬に將たるに過ぎず。上曰く、君に於ては何如と、曰く臣は多々益善のみ。」

ちの部

【逐鹿】 帝位を争ふこと。鹿を帝位に比し、之を争ふに喩ふ。魏徵の詩に「中原還逐鹿、

投筆事戎軒」

【魑魅魍魎】 皆怪物にて、人に害を與ふるもの。魑魅は、山林の異氣の生ずる所。魍魎

は、水の神。

【塵寰】

俗人どもの住居せる、うるさき場所をいふ。寰は、くぎりある場所のこと。

【持論】

一家の説を立て、これを執持するをいふ。おのれの主張にかゝる議論。

つ の 部

【杜撰】

撰述の錯誤多きをいふ。野客叢書に「杜默、詩を爲るに、多く律に合はず。故に事の格に合はざるものを言つて杜撰となす」。

【鼓を鳴らして之を攻む】

罪を聲らして攻むること。

【罪死に容れられず】 罪の極めて大なること、死に至るとも、猶以て之を容るゝに

足らざるをいふ。

て の 部

【亭午】

正午の時をいふ。午は日中、亭は直にて、丁に通ず。午時にあたる意。

【底止】

底は至なり。定限といふに同じ。

【鼎足】

三人相須つて、功を立つるをいふ。鼎は三足なればなり。

【敵愾】

敵は當、愾は恨怒なり。王の恨み怒らるゝ所に當ること。左傳文公四年に「諸侯王の愾する所に敵して、其の功を獻す」。

【鐵心石腸】

志操固くして、外物のために、心を動かされざること。

【徹頭徹尾】

始めより、終りまで通じての意。徹は通の意。

【天涯】

極めて遠き地をいふ。古詩に「相去萬餘里、各在天一涯」。

【天爵】

自然に貴き所の徳をいふ。人爵は、人の與ふる位なれば、必ずしも公平なるものにあらず。

【天職】

天の賢人に與へて、民を治めしむる職。君主の専らにする所にあらず。支那にては、民を天民といひ、天民を治むるには、天意に叶ひたる賢人ならざるべからずといふなり。

【椽大の筆】

文章の立派なるをいふ。大手筆といふが如し。

【恬澹】 利欲に淡泊なること、心のしづかに安らかなること。恬は安靜、澹は淡に同じ。

【恬として怪まず】 恬は安なり。たゞ安閑とおちつきて、少しも疑ひ怪まざる意。

【天歩艱難】 天歩は、天の時運といふが如し。歩は運の意なり。時運の日々に非なること。多くは朝廷の衰微せるに用ゐる。

【天籟】 自然に鳴る音響をいふ。風の樹に觸れて聲をなす類なり。

### との部

【儉安】 一寸のがれに、安きをむさぼること。

【同工異曲】 音楽のたくみななる點は同じくして、その演ずるところの曲調は異なるをいふ。轉じて詩文などにもいふ。

【時と俯仰せず】 時俗と合はざること。

【徳孤ならず】 徳のある者は、孤立せず、必ず同類ありて之に應ずる者あること。

【斗筲の人】 胸中の鄙しく細かき人物をいふ。斗は量の名、十升を容る。筲は竹器にて

二升を容るゝもの。

【塗炭之苦】 水火の苦しみをいふ。塗は泥、炭は火なり。書注に「有夏の昏徳、民墜塗炭」。

【咄嗟】 立ちどころの意。猶呼吸の間といふが如し。

【咄咄怪事】 嗟歎すべく、怪むべき事の意。咄々は嗟歎の意。

【土崩瓦解】 土の崩れておつる如く、瓦の碎けて離るゝ如く、潰亂ること。

### なの部

【内訌】 うちわもめ、のことにて、内亂といふに同じ。

【名を竹帛に垂る】 己が名を史上にかゝげて、不朽に傳ふること。

【爾に出でたる者は爾に反る】 禍も福も、皆自ら取る所なるをいふ。孟子に「曾子曰、戒之戒之出乎爾者、反乎爾者也」。

【南風競はず】 南風は、南方の國風の詩なり。其の詩を歌ふに、其の音衰弱して競はず。

ざるは、以て南方の國勢の振はざるを知るべしとの意。左傳の襄公十八年に「晋人楚の師ありと聞く。師曠曰く、害あらず。吾驟北風を歌ひ、又南風を歌ふ。南風競はず、死聲多し。楚必ず功なからむ」。楚は南方なり。

### への部

【乳虎】 威勢の猛烈なること。子を乳養せる虎は、最も兇暴なるが故に喩へとす。漢書

寧成が傳に「寧見乳虎、無値寧成之怒」。

【肉袒】 上衣を去りて、肢體を露はすことにて、ハダヲヌグといふに同じ。

【任俠】 ヲトコダテの事。相與に信ずるを任となし、是非を同じくするを俠といふ。

### ねの部

【熱鬧】 人衆くして、さわがしきこと。雜沓して静かならざること。

【涅槃】 さとりを開くこと。涅を不生といひ、槃を不滅といふ。不生不滅は佛教の眞理

なり。圓寂、滅度、歸寂など、譯す。普通に釋氏の死を稱す。

### はの部

【倍蓰】 倍は一倍、蓰は五倍のこと。

【輩出】 後を追ひて、續々と出づるをいふ。

【背誦】 そらよみすること。誦誦に同じ。

【背水之陣】 敵前に在り。水、後に在り。退く時は、則ち水に溺る。故に進んで退かず。

必ず敵を破らむと志す。兵法に、所謂、之を死地に陥し、いれて而して後生さ、之を亡地に置きて、而して後存ずといふ義に同じ。韓信の趙軍を破りし故事に本づく。

【鮑魚の肆】 ヒモノやシホツケの魚を賣るみせにて、臭氣の甚しき處。以て悪人の居

所に喩ふ。孔子家語に「與不善人居、如入鮑魚之肆、久而不聞其臭」。悪人と交る時は、覺えず知らず、惡に化せらる、をいふ。

【旁午】 縦横の意。使者旁午すといへば、使者が縦横に往來すといふこと。

【暴虎馮河】 虎をてうちにするを暴虎といひ、河を徒渉するを馮河といふ。極めて危きことに喩ふ。

【裂貶】 ほめること、しりぞけおとすこと。褒は美を稱揚すること。貶は悪をおとすこと。

【亡羊の歎】 學問の道、多岐（エダミチ多ク）又多端（イロくサマ々）にして、一も得る所なきを歎するなり。列子に、羊を亡ひし者、數多の人を率ゐて逐ひしに、岐路（エダミチ）の中に又岐あり、遂に獲ずして反りぬといふに本づく。

【白頭新の如く、傾蓋故の如し】 幼時より白髪の老人となるまで交りても、意氣合はざる時は、昨今相識りたる人の如く、冷淡なるをいふ。傾蓋如故とは、道にて相逢ひ、蓋を傾けて語るほどの、寸時の交際にて、能く心を知り得れば、故舊（フルナジミ）の友人の如く、親密となるをいふ。

【白面の書生】 年少くして、事務に經驗なきものをいふ。

【撥亂反正】 亂世を治め、正道に復すること。

【盤根錯節】 盤は蟠に通ず。わだかまれる根、いりまじれるふしにて、事の難義なるものに喩ふ。鋭き又は一にありて、始めてその利器たることを證すべし。人も亦かくの如く、困難の事にあひて、始めてその伎倆を顯すを得べしとの意。後漢書虞詡傳に「詡爲朝歌長、笑曰、不遇盤根錯節、何以別利器乎」とあり。朝歌は賊多く、治め難き地なり。

【晩節】 節は時期にて、晩節は、末時といふが如し。晩年と其の意同じ。

【反目】 なかわるきこと。目をそばめて、にらみあふをいふ。

【萬綠叢中紅一點】 多くのつまらぬ物の中に、一つのすぐれたるものあるにいふ。

【爬羅剔抉】 廣く人才を探して用ゐるをいふ。爬は爪にてかきあつむること。羅は網にて鳥を捕ふること。剔は骨を解くこと。抉はくじり出すこと。

### ひの部

【匪躬之節】己が一身の利害を顧みずして、君主のために忠節を盡すこと。

【秕政】悪しき政。弊政といふに同じ。秕は穀の實のらざるもの。

【髀肉之歎】無事に苦み、功名を立つること能はざるを歎くこと。馬上に在る時は、鞍にて髀をする故、肉消えて肥えざれども、久しく騎せざる時は、髀肉生ずるなり。かかれば馬上に功名をも遂げず、徒に老いむとするを悲むとの意にて、蜀の劉備が劉表に語りし言なり。

【百尺竿頭一步を進む】百尺の竿頭(サヲノサキ)に達するは、既に極點まで達せるなり。その上に一步を進むるは、更に工夫を加へて、上に向ふ義とす。

ぶの部

【蜉蝣の一期】人生の短きに喩ふ。蜉蝣は極めて短命の蟲なり。一期とは、一生涯をいふ。蘇東坡「寄蜉蝣於天地」。

【風霜の氣】文章の、つよきはげしき意。

【夫子自道】自分の事を、自分でいふ意。論語に「子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不

憂、知者不惑、勇者不惧、子貢曰、夫子自道也」。

【風聲鶴唳】つまらぬ事に驚きて、いたく怖るゝこと。唳は鶴の鳴聲なり。

【負荷】父の業を受けつぎて、その任にたふること。左傳昭公七年に「古人有言、曰、其父析薪、其子弗克負荷」。

【附會の説】コジツケの説。正理を知らずして、事の宜しきによりて、附著合會するこし。

【覆醬】醬油入れのおほひ、即ちふたにすること。著書の世に行はれずして、反古となるにいふ。自ら作りし詩文を、謙遜するにも用ゐる。

【不世出の才】數世を経て、稀に出づる程の才。常に出づべき者にあらざるること。

【舟に刻み劔を求む】時勢の移りかはるをも知らず、舊法を頑守するに喩ふ。楚人江を涉り、劔を舟より落し、舷を刻みて劔を落し、所の印とし、之を求めむとするも、



舟は既に行いて、劔は行かず。愚の甚しきに非ずや、「刻舟劔を求む」の條を看よ。

【文質彬彬々】 文はカザリ、アヤのあること。質はスナホにて、あやのなきこと。文と質

と相雜りて、ほどよく調和せること。彬彬は、物の相雜りて、適當し、均しきこと。

【文恬武嬉】 文武の官吏、安らかに嬉みて、禍亂の生ずるをも知らざる意、恬は安なり、嬉一に熙に作る。

【故を温ねて、新を知る】 舊聞を温習して、新知を發明すること。温習は忘れぬやうにサラヘルこと。

### への部

【剽竊】 人の詩文を盗みて、己の作とすること。

【豹變】 善にうつること。君子善に遷りて、舊惡を改め去るは、その著しきこと、豹の斑

采の美なるが如し、故に喩へとす。

【瞥見】 僅にチラと見ること。瞥は目を過すこと。

### ほの部

【鵬程萬里】 海面の極めて廣大なるにいふ。

【木強漢】 樸鈍にして、文飾(カザリ)なき男をいふ。木は質朴、強は勁直の意。

【木訥】 人のうはべを飾らず、すなほなること。木は質樸、訥は遲鈍なり。

【蒲柳之姿】 體質の衰弱せる者に比していふ。蒲柳は、カハヤナギ、またエノコロヤナギ。

### みの部

【耳を掩ひて鈴を盗む】 自分だけの氣ずましをいふ。惡事を行ひて、人の聞かむこ

とをおそれ、自ら耳を掩ふとも、その效なきをいふ。

【脈脈】 絶えざる貌、「清風一」。

### むの部

【矛盾】

自ら言ふことの、彼是撞著すること。韓非子に、「楚人に、矛と盾とを鬻ぐ者あり。曰く吾盾の堅きことは、能く貫くものなしと。又曰く、吾の矛の利ことは、何物をも貫かざることなしと。或人曰く、子の矛を以て、子の盾を陥れむには何如と、その人應ふること能はず。」の話あるに本づく。

【寧雞口】

牛の後大なりと雖、糞を出す。以て小なれども潔く、上に立つべし。大なれども、卑しき地に居らざるべからずとの意。蘇秦の語。

めの部

【面従後言】

目の前にては、こびへつらひ、その人の居らざる時は毀るをいふ。後は背後の意。

【面折】

人の過失を、まのあたり責むること。

【面縛】

手を後にしばり、唯其の面を見はすのみ。

【面諛】

人の面前にて、へつらふこと。

もの部

【蒙塵】

天子は、常に道を清めて行き、九重の内に居る。故に外に奔るを蒙塵といふ。左傳僖公二十四年に「天子蒙塵于外、敢不奔問、官守。」

【目光炬の如し】

眸子の光の、きら／＼として、人を射ること。炬火の如きをいふ。

【目撃】

目で、ちらと見ること。撃は觸の意。

【模糊】

はつきりせずして、廣き貌。

【物故】

漢の代以來、死のことを物故といふ。その意は、物は勿にて、故は事なり。人死すれば、復事を能くする所なきをいふと。又一説に、その服用せし所の物、皆すでに故しといふ意なりと。

【門外漢】

その事に與り知らざる者のこと。

【門外雀羅を設くべし】人の訪ひ来る者なき家の門には、群雀來りあつまる。故に羅を張りて捕ふべしとの意。

【摸稜】事を處するに、判然可否せざることを。「曖昧—」。

やの部

【颺言】わざと聞ゆるやうに、大聲にていふこと。颺とは、大言して疾きをいふ。

【羊頭を懸けて、狗肉を賣る】看板には、善きものを出しおきて、實は惡しき物を賣ることに喩ふ。

【様に依り、葫蘆を畫く】古人のしわざに倣ひて、少しも新しき意匠を出さざることを。蘆とはユフガホのこと。

【野鶴】自由に田野に遊ぶ鶴のことにて、閑人に喩へてもいふ。「閑雲野鶴」。

【野に遺賢なし】賢人皆朝廷に用ゐられて、民間に残らぬこと。

【山に躓かずして、埜に躓く】小事は、兎角油斷して、失敗し易きに喩ふ。

【擲揄】侮りからかふこと。

ゆの部

【勇退】いさぎよく、仕官を罷めて去ること。

【勇猛精進】如何なる艱難にも屈せず、勉強して怠らぬこと。佛經の語。

よの部

【俑を作る】惡例を作りはじむること。俑は、葬に従ふ木偶人なり。俑は面目甚だ人に似たり。孔子其の不仁を惡んで、後世、人を以て葬に殉する者あるに至らむといへり。これより、廣く不善の事を首唱する意に用ゐる。

【鷹鷂の鳥雀を逐ふが如し】奸邪を誅伐することの猛烈なるに喩ふ。鷂はスマメタカ。

【沃野千里】沃野とは、肥えたる田野なり。漢書張良傳に「夫關中左殽函、右隴蜀、一」

——

【與國】 なかまの國のこと。相與すること。相與に交よきこと。

【世と推移す】 時勢に伴ひて逆はぬこと。

【餘烈】 餘威といふに同じ。賈誼の過秦論に「奮六世之烈」。

【輿論】 衆人の議論をいふ。輿とは衆の意。

### らの部

【來者猶追ふべし】 過去のことは、致し方なけれど、今來りたる事は、なほ追ひて、

とり返すことを得べしとの意。論語に「往者不可諫、來者猶可追」。

【雷同】 雷の聲を發して、物の同じく應ずる如く、人の言を聞きて、善惡の差別なく、之

に賛同すること。「附和——」。

【磊砢】 小石の衆くある貌。

【磊落】 胸の大にうちひらけたる貌。心の大なること。細事にか、はらぬこと。よく

せぬこと。「辭氣——觀る者疲れを忘る」。

【落魄】 落ちぶれること。

【落莫】 さびしく、つまらぬこと。

【洛陽の紙價貴し】 著書の甚だ多く賣れゆくこと。晋の左思、十年を費して、三都の

賦を作る。諸人競うて相傳寫し、洛陽之れがために紙貴しといふに本づく。

【羅拜】 並びて拜むこと。

【蘭摧玉折】 賢人の死に喩ふ。

【濫觴】 物のはじめをいふ。家語の三恕篇に「江始出、于岷山、其源可<sub>レ</sub>以濫觴」。

【嵐翠】 みどりいろの山のもやをいふ。白居易の詩に「三十六峰晴、雪銷嵐翠生」。

【爛醉】 大に酒に酔ふこと。

【羅列】 つらなり、並ぶこと。

### りの部